

< 4歳クラス V・VI期 4月 > 「幼児の遊びの見立てに寄り添う」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症による影響で、新年度の始まりが5月11日からとなった。感染を防ぐ対策から、荒天の場合を除いて、遊び時間のほとんどを屋外で過ごすことになった。4歳クラス児には、昨年遊んだ経験から、比較的スムーズに遊びを始め、池でのオタマジャクシ捕まえや園庭の草花を使った料理づくり、砂場や土山での土遊びなど、様々な遊びを楽しんだ。3歳から5歳まで、すべての幼児が園庭で遊ぶため、異年齢のかかわりも多く、一緒にブランコを楽しんだり、オタマジャクシの捕まえ方を年上の幼児から教えてもらったりする姿も見られた。

新しい環境での遊びに慣れ始めたころ、副担任との振り返りで屋内での遊びとの比較が話題になった。例年、この時期は折り紙や廃材を使った製作遊びに没頭する姿が見られる。そうした中で、年上の幼児が始める「お店屋さんごっこ」に興味をもった幼児が、遊戯室などで自分のつくった製作物を使って店を出し始めるのである。しかし、屋外遊び中心の今年、お店屋さんごっこに発展する様子がないと感じていた。草花料理などの製作物はあるものの、それを置いたり店として出したりするスペースがなかったからではないかと考えた。教師は使わなくなった机を保育室前のテラスに置くなどして工夫してみたが、保管場所にはなかったものの、期待した姿は見られなかった。お店屋さんごっこのような、他の幼児とのかかわりを必然とする遊びは、人とかかわり方を知る、遊びのルールを知るといった、この時期の幼児の育ちに大切な要素をもっている。どのような援助を行うことで、遊びを広げることができるのか、担任と副担任は日々模索しながら保育を行っていた。

ある日、5歳保育室のテラス前に人だかりができていた。たくさんの幼児が手に色水の入ったボトルを持っている。A児がその近くで様子を眺めていた。

5月28日

教師：「いっぱい集まってるね」

A児：「先生、私もやりたい」5歳クラス児が集まる方を見て言う。

教師：「何して遊んでるのかな？」

A児：「色水遊びだよ」

教師：「へえ、色水なんだ。Aちゃんもやりたいの？」

A児：「うん、先生も一緒に付いてきて」

A児と遊びの輪の中に行く。

5歳児：「一緒にやる？」

A児：「うん、どうやるの？」

5歳クラス児：「えっとね、これに水を入れて色のペンでこうやっ混ぜるんだよ」

A児：「分かった」

A児は、5歳クラス児に交じって楽しそうに色水をつくっていた。そこは、5歳保育室のテラスではなく、少し離れた花壇の前だった。小さな机が複数置かれ、5歳クラス児が花壇と机の間に立つことで、店のカウンターのような形になっていた。担任は、その日の振り返りで5歳クラス児が設置した遊びの「場」の面白さについて話した。砂場から近く、いろいろな幼児が通る所であること、花壇前という通行を邪魔せず、ある程度の広さを確保できる立地であること、移動可能な机や丸太、ビールケースを使っていることなどを伝えた。そこは、まるで遊戯室でよく見るお店屋さんごっこのような雰囲気があった。屋内遊びでは机だけでなく、大型積み木やゲームボックスなど、様々な用具を使う。そして、それは机にも椅子にもなるのである。屋外にも幼児が手軽に扱うことのできるような用具があれば、遊びが広がるのではないかと話し合った。

6月2日

B児とC児がリヤカーに道具を詰め込んでいる。園庭に音楽が鳴り、アナウンスが流れる。

B児：「あっ、お茶タイムだ」

C児：「水飲みに行こう」

B児：「私、ここで遊びたいな」

C児：「じゃあ、こっちに持ってこよう」

B児とC児がテラスから持ってきた水筒をシートに置く。

教師：「Bちゃんたち、今日はここで飲むの？」

B児：「そうだよ。ここ、涼しいもん」

教師：「本当だ。風が気持ちいいね。ここで飲んだらもっとおいしくなりそうだね」

C児：「いいでしょ。先生もここ座る？」

教師：「ありがとう。じゃあ、先生も水筒持ってこようかな」
C児：「じゃあさ、ここでバーベキューしようよ」リヤカーから道具を出し、シートの上に広げる。
教師：「バーベキュー？いいね。じゃあ、どこに座ろうかな」
B児：「ここ使っていていいよ。どうぞ」
教師：「なるほど、これに座ればいいんだ。バーベキューの気分になってきたよ」
C児：「じゃあ、道具ここに広げよう」

新型コロナウイルス感染症対策と熱中症対策により、本年度は、すべての幼児がレジャーシートを持ってきていて、必要に応じて外で広げて休憩できるようにしている。屋外遊び中心のため、熱中症対策として休憩時間が設けられたことで、遊びが一度途切れしてしまうことがあることに、教師は悩んでいた。B児とC児は、遊んでいた所にレジャーシートを持ってきて、水筒の水を飲んでいて、バーベキューごっこを始めたB児は、リヤカーにスコップやコップなどを入れて運んでいたが、それを休憩用のレジャーシートに置くことを思い付いた。B児とC児はその後、片付けの時間までそこから移動することなく、じっくりとバーベキューごっこを楽しんでいた。振り返りでそのことを副担任に話すと、「レジャーシートがあることによって、そこが遊びのスペースとして認知されたのではないか」という共通認識につながった。振り返ってみると、4歳クラス用の大きめのレジャーシートをテラスに出していた際、そこに机や椅子を置いてお店屋さんのような遊びが行われていた。ビールケースやレジャーシートを使うことは、幼児にとって「自分たちの遊びのスペースをつくる」こと、「ここからここまでが店であると仲間と共通理解することで、遊びのイメージが明確になり、遊びが途切れにくくなること」につながるのではないかと考えた。そこで、店としての「場」を意識するような援助を行うことで、「ここは私のお店」というイメージにつながり、ごっこ遊びの発展が期待できるのではないかと考えた。

6月17日

B児が自転車のかごや荷台に道具を詰め込んでいる。通りかかった教師を見てB児が話しかける。
B児：「先生、僕ね、今日はバーベキュー屋さんするんだよ」
教師：「そう、すてきだね。今日はどこでするのかな」
B児：「考え中」
教師：「そういえば、この間、バーベキューに誘ってくれてありがとう」
B児：「今日はお客さんを呼びたいんだ。そうだ、今日はシート持って行こう」
教師：「へえ、お客さんどこに来るのかな？」
B児：「ビールケースも持って行くんだよ。あれ？ない。うーん」その場でしばらく考える。
教師：「そういえば、幼稚園の裏にビールケースがいくつかあったかも」
B児：「じゃあ、それ持って行く」
教師：「B君、何か手伝うことはありますか？」
B児：「じゃあ、いっぱい運ぶの手伝って」
教師：「いいよ。まかせて」
B児：「大きなお店にするぞー」園舎裏に向かって走っていく。

バーベキュー屋さんをしようと考えていたB児だったが、その日は他の幼児にビールケースのほとんどを使われていたため、道具が足りなくなっていた。そこで、保管して使われていなかったビールケースの場所を伝え、一緒に運んだことで、B児はお客さんが来ることを想定したバーベキュー屋さんをつくることにつながった。担任は、ビールケースを取りに行く援助まで行ったが、その後、副担任がB児の遊びを見て話しかけ、店をつくるまでの援助を行っていた。B児の遊びを見た他の幼児も一緒に加わり、園庭のベンチや机なども運んで大きな店が完成した。B児は副担任との会話の中で、店のイメージを膨らませていた。できあがった店を見て、たくさんのお客さんが店を訪れていた。

振り返りの話し合いで、副担任はB児の店に対するイメージの広がりについて驚いていた。ビールケースとシートの並べ方にこだわり、店のイメージを膨らませながら道具を置く位置を考え、黙々と準備するB児はまさに遊び込んでいた。そして、その要因として、ビールケースやレジャーシートを置くことによって作り出される遊びの「場」がポイントになっていた。新型コロナウイルス感染症対策によって遊びの環境が変化したことによって、ビールケースやレジャーシートが幼児の遊びにどのように取り入れられ、イメージ化されているのかを、担任と副担任が保育中や振り返りを通して共通理解し、援助を行ってきたことが、B児の遊びの姿につながったと捉えた。

6月22日

D児が教師のところに来る。
D児：「先生、ぼくね、ビールケース欲しいの」
教師：「ビールケース？どんなふうに使いたいの？」

D児：「あのね、Bくんみたいにバーベキューごっこがしたいの。だからビールケース」
教師：「分かったよ。そういえばBくんのお店ってどんなのだったかなあ」
D児：「うーんとね、シート広げてね、そこにお店を建ててたの」
教師：「シートか、やま組のシートもあるよ」
D児：「いいね、ちょうだい」
教師と道具を準備する。
D児：「えっとね、ここにしようかな」
教師：「Dくん、どうしてここにするの？」
D児：「ここはね、涼しいでしょ。それでね、みんなに見えるの」
教師：「へえ、確かにここならそら組さんもたくさん通るね。シートはどこに敷くの？」
D児：「ここ。ぼくはここに座るの」
教師：「なるほど、じゃあ、お客さんが来たら」
D児：「こっちに来るの。それで、ここに座るんだよ」
教師：「なるほど、じゃあ、こっちがお店の入り口かな？」
D児：「そうそう。あつ、じゃあ、ここに看板つくろう。先生、紙とペンください」
教師：「いいよ。持って来るね」

B児のバーベキュー屋さん遊びから土日を挟んだ月曜日にD児が同じような遊びをしたいと話しに来た。会話の内容から、B児の遊びがビールケースとレジャーシートを使っていることをD児はよく覚えていた。店をどこにつくるのか決める際、B児はテラス前の通りを選んでいて、なぜD児がそこを選んだのか分からなかったが、問いかけるうちに、そこが遮光シートの日陰の部分であることに気付いた。ビールケースやコンロなど、様々な道具を置いていたが、日陰からはみ出すことはなかった。幼児にとって、日影の部分までが自分の店のスペースなのだと考えていたことに驚かされた。教師はバーベキューの店をつくるまで手伝っていたが、その後、遊びが発展していったことから、少し離れたところから見守る援助に切り替えることにした。手伝っていた幼児が日なたにケースを置こうとすると、D児は「そこ、お店じゃないよ。こっち」と置く位置を指定していた。

振り返りでは、特にお店屋さんごっこのような遊びに対して、幼児が遊びの「場」をイメージした空間認識をもっているのではないかと伝えた。屋外特有の直線的、平面的、そして対称的ではない空間に対して、どのような遊びの「場」をつくるのかによっても、遊びの広がり方が変わることを確認した。

その後の幼児の遊びの姿を見ていると、様々なことに気付かされた。例えば、ピラミッド状に組み立てたヒューム管でお家ごっこをして遊んでいた幼児は、3つのヒューム管の中を部屋割りすることで、自分のスペースを確保していた。また、ビールケースを組み立てた秘密基地づくりでは、ケースを積み高さが高く、狭い空間ほど親しみを感じていた。幼児の遊びを平面的、空間的な範囲に注目して見ることで、幼児の遊びのどこに面白さを感じ、どのようなイメージをもっているのかが解釈できるようになってきたのである。

考察

以前、お茶の水女子大学附属幼稚園で保育を参観させていただいた際、半畳ほどの「ゴザ」という材に魅力を感じた。ゴザが床になり、天井になり、壁にもなるのである。遊んでいた幼児は、一緒につくる仲間に「ここかな」「だってさあ、ここだとね」など、常にイメージを共有するために声をかけながらお店をつくっていた。お店屋さんごっこの場合、そこで使う調理器具や商品などに注目しがちだが、幼児のイメージには見えない壁や屋根も含めた店そのものの「場」も存在する。それは、幼児がお店屋さんごっこを始める際に、これまで実際に連れて行ってもらった店や、テレビや絵本などで知った店のイメージを想像しているからではないか。遊戯室のような屋内なら比較的幼児はイメージしやすいが、屋外の場合は、幼児の思いを読み取ってからのほうが、多様な援助を考えることができる。昨年度、5歳クラス児が「ここは森のレストランだよ」と言って、大きな切り株を中心にお店を開いていたのを思い出した。屋外には大小様々な木々が植えられている。幼児はイメージに合った木を選んでその下にお店を開くかもしれない。ジャングルジム、砂場、ヒューム管などもお店の一部になる可能性がある。そして、風の当たる山の上や日よけの遮光シートが作り出す影さえも幼児にとってはお店をイメージするきっかけになるのである。幼児が何を見て、どんなお店のイメージを膨らませ、それを実現させようとしているのか、幼児の思考の読み取りが、確かな援助につながるかと考える。

4歳クラスになり、幼児は自分の遊びに没頭するだけでなく、他の幼児と思いを伝え合いながら遊ぶ姿が見られるようになってきた。遊んでいるイメージを自分のイメージに重ね、共有しているのである。VI期の年間指導計画では、「自分の考えを周りの友達や教師に伝え、イメージを共有し、大勢でかかわって遊ぶ」姿を大切にしている。教師が、幼児がもつ遊びのイメージを読み取り、遊んでいる幼児同士を仲介したり、一緒に遊ぶ幼児に伝えたりする。そうすることで、幼児はしたい遊びに夢中になり、また協同する面白さを感じ始めるようになるかと考える。そして、そのような遊びを繰り返すことで、幼児は人との関わり方に気付き、相手に分かるように話したり、お互いの意思や考えを共有したりする姿に育つことが期待できる。

今回は、ビールケースやレジャーシートを活用した遊びの「場」づくりが、幼児が没頭して遊ぶきっかけとなり、また遊びの幅の広がりにつながったと評価した。お店屋さんごっこについては、日を追うごとに教師がかかわることが少なくなってきたと感じている。幼児の遊びをいかに読み取るかによって、過剰なかかわりを減らし、幼児同士のかかわりを増やすことに気付かされた。日々の幼児の姿を担任・副担任とで共有し、どのような援助を行うべきかを模索することが、幼児の遊び込む姿を支えることにつながっている。新型コロナウイルス感染症対策による新学期が始まって以降、園庭の環境は一変した。新しい環境の中だからこそ多くのことに気付かされた。まだまだ教師の援助が幼児の遊びにぴったり寄り添っているとは考え難い。より遊びの本質を見抜き、一人一人の幼児の思いに合った環境設定と援助ができるよう保育を改善していく必要がある。

<4歳クラス V・VI期 4月> 「幼児の遊びの『場』をとらえる」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症による影響で、保育の始まりが5月11日からとなった。感染を防ぐ対策から、荒天の場合を除いて、遊びのほとんどを屋外で過ごすことになった。4歳クラス児には、昨年遊んだ経験から、比較的スムーズに遊びを始め、池でのオタマジャクシ捕まえや園庭の草花を使った料理づくり、砂場や土山での土遊びなど、様々な遊びを楽しんだ。3歳から5歳まで、すべての幼児が園庭で遊ぶため、異年齢のかかわりも多く、一緒にブランコを楽しんだり、オタマジャクシの捕まえ方を年上の幼児から教えてもらったりする姿も見られた。

新しい環境での遊びに慣れ始めたころ、副担任との振り返りで屋内での遊びとの比較が話題になった。例年、この時期は折り紙や廃材をつかった製作遊びに没頭する姿が見られる。そうした中で、年上の幼児が始める「お店屋さんごっこ」に興味をもった幼児が、遊戯室などで自分のつくった製作物を使って店を出し始めるのである。しかし、屋外遊び中心の今年、お店屋さんごっこに発展する様子が少ないと感じていた。草花料理などの製作物はあるものの、それを置いたり店として出したりするスペースがなかったからではないかと考えた。使わなくなった机を保育室前のテラスに置くなどして工夫してみたが、保管場所にはなかったものの、期待した姿は見られなかった。お店屋さんごっこのような、他の幼児とのかかわりを必然とする遊びは、人とかかわり方を知る、遊びのルールを知るといった、この時期の幼児の育ちに大切な要素をもっている。どのような援助を行うことで、遊びを広げることができるのか、担任と副担任は常々模索しながら保育を行っていた。

ある日、5歳保育室のテラス前に人だかりができていた。たくさんの幼児が手に色水の入ったボトルを持っている。A児がその近くで様子を眺めていた。

5月28日

教師：「いっぱい集まっているね」
A児：「先生、私もやりたい」5歳クラス児が集まる方を見て言う。
教師：「何して遊んでるのかな？」
A児：「色水遊びだよ」
教師：「へえ、色水なんだ。Aちゃんもやりたいの？」
A児：「うん、先生も一緒に付いてきて」
A児と遊びの輪の中に行く。
5歳児：「一緒にやる？」
A児：「うん、どうやるの？」
5歳クラス児：「えっとね、これに水を入れて色のペンでこうやって混ぜるんだよ」
A児：「分かった」

A児は、5歳クラス児に交じって楽しそうに色水をつくっていた。そこは、5歳保育室のテラスではなく、少し離れた花壇の前だった。小さな机が複数置かれ、5歳クラス児が花壇と机の間に立つことで、店のカウンターのような形になっていた。担任は、その日の振り返りで5歳クラス児が設置した遊びの「場」の面白さについて話した。砂場から近く、いろいろな幼児が通る所であること、花壇前という通行を邪魔せず、ある程度の広さを確保できる立地であること、移動可能な机や丸太、ビールケースを使っていることなどを伝えた。そこは、まるで遊戯室でよく見るお店屋さんごっこのような雰囲気があった。屋内遊びでは机だけでなく、大型積み木やゲームボックスなど、様々な用具を使う。そして、それは机にも椅子にもなるのである。屋外にも幼児が手軽に扱うことのできるような用具があれば、遊びが広がるのではないかと話し合った。

コメントの追加 [k1]: 遊びの中で、自然と「異年齢とのかかわり」が生まれることについての共感が多かった。年上の

本園は、3歳から5歳までのすべての幼児が園庭で遊んでいること、同じ場所で同じ遊具、道具を使い、異年齢のかかわりが制限されていない。だからこそ、自然とかかわりが生まれ、そこから自分の遊びに取り入れていくことができる。それが、幼児の遊びに広がりをもたせていると考える。

¹ 自然と遊びの中で異年齢のかかわりがあり、年上の幼児の遊びを真似したり参加したりする中で遊び方を知っていく姿がある。今年度は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から屋外での遊びを中心になったことでよりかかわり合って遊んでいる (a)

² 遊びの中で自然と異年齢のかかわりが生まれる。幼児のやりたいことを実現できる環境 (b) 異年齢との関わりができる。年上の幼児からの影響を自然に受けられる環境がある (g)

³ 幼児の行動や思いを予想して環境を準備し、幼児の実際の様子からその都度振り返り確認し合う (g)

⁴ 「これでよい」と一人で判断せず、絶えずどのような援助が幼児の姿を支えることになるのか悩みながらも副担任と相談しながら保育を進めている (a) 保育の評価 (振り返り) が日常化されている (e)

⁵ 当たり前のように見られる異年齢で遊ぶ姿。こうなることを5歳クラス担任も想定している (f)

⁶ 幼児の意欲を支えるさまざまな道具がいつでも使えるように準備されている (a) 幼児がイメージしている遊びが実現するよう、様々な道具や材料を準備しておく (f)

6月2日

B児とC児がリヤカーに道具を詰め込んでいる。園庭に音楽が鳴り、アナウンスが流れる。
B児：「あっ、お茶タイムだ」
C児：「水飲みに行こう」
B児：「私、ここで遊びたいな」
C児：「じゃあ、こっちに持ってこよう」
B児とC児がテラスから持ってきた水筒をシートに置く。
教師：「Bちゃんたち、今日はここで飲むの？」
B児：「そうだよ。ここ、涼しいもん」
教師：「本当だ。風が気持ちいいね。ここで飲んだらもっとおいしくなりそうだね」
C児：「いいでしょ。先生もここ座る？」
教師：「ありがとう。じゃあ、先生も水筒持ってこようかな」
C児：「じゃあさ、ここでバーベキューしようよ」リヤカーから道具を出し、シートの上を広げる。
教師：「バーベキュー？いいね⁷。じゃあ、どこに座ろうかな」
B児：「ここ使っていいよ。どうぞ」
教師：「なるほど、これに座ればいいんだ。バーベキューの気分になってきたよ」
C児：「じゃあ、道具ここに広げよう」

新型コロナウイルス感染症対策と熱中症対策により、本年度は、すべての幼児がレジャーシートを持ってきていて、必要に応じて外で広げて休憩できるようにしている。屋外遊び中心のため、熱中症対策として休憩時間が設けられたことで、遊びが一度途切れしてしまうことがあることに、教師は悩んでいた。B児とC児は、遊んでいた所にレジャーシートを持ってきて、水筒の水を飲んで⁸いた。バーベキューごっこを始めたB児は、リヤカーにスコップやコップなどを入れて運んでいたが、それを休憩用のレジャーシートに置くことを思い付いた。B児とC児はその後、片付けの時間までそこから移動することはなく、じつくりとバーベキューごっこを楽しんでいた。振り返りでそのことを副担任に話すと、「レジャーシートがあることによって、そこが遊びのスペースとして認知されたのではないか」という共通認識につながった。振り返ってみると、4歳クラス用の大きめのレジャーシートをテラスに出していた際、そこに机や椅子を置いてお店屋さんのような遊びが行われていた。ビールケースやレジャーシートを使うことは、**幼児にとって**⁹「自分たちの遊びのスペースをつくる」こと、「ここからここまでが店であると理解することで、遊びのイメージが明確になり、遊びが途切れにくくなること」につながるのではないかと考えた。そこで、店としての「場」を意識するような援助を行うことで、「ここは私のお店」というイメージにつながり、ごっこ遊びの発展が期待できる¹⁰のではないかと考えた。

6月17日

B児が自転車のかごや荷台に道具を詰め込んでいる。通りかかった教師を見てB児が話しかける。
B児：「先生、僕ね、今日はバーベキュー屋さんするんだよ」
教師：「そう、すてきだね。今日はどこでするのかな」
B児：「考え中」
教師：「そういえば、この間、バーベキューに誘ってくれてありがとう」
B児：「今日はお客さん呼びたいんだ。そうだ、今日はシート持っていこう」
教師：「へえ、**お客さんどこに来るのかな**¹¹？」
B児：「ビールケース持っていくんだよ。あれ？ない。うーん」その場でしばらく考える。
教師：「そういえば、**幼稚園¹²の裏にビールケースがいくつかあったかも**」
B児：「じゃあ、それ持っていく」
教師：「B君、**何か手伝うことはありますか**¹³？」
B児：「じゃあ、いっぱい運ぶの手伝って」
教師：「いいよ。まかせて」

⁷ 幼児の言動を肯定的に受け止め、共感する (e)

⁸ 好きなところで水分補給をする。自分の生活を自分でつくっていると感じるとともに、それが認められる環境のよさ (a)

⁹ 保育者にとって都合のよい保育ではなく、絶えず「幼児にとってどうか」という視点をもって保育を考えている (a)

¹⁰ 遊びの空間がつけられることで遊びのイメージが明確になることを読み取り、「場」に焦点を当てて援助を行っていく。このプロセスが大事

(a) 空間が定まることにより遊びのイメージが具体的になる (f)

¹¹ 焦点化する言葉をかけることで幼児のイメージが具体化されていく (e)

¹² 場所だけ伝え、どうするかは幼児自身が決めている (b) 使える材があることを知らせることにより、やりたい思い・意欲を支える (e)

¹³ B児一人だったので意欲が続くように手伝いを申し出た。「手伝うよ」ではなく「手伝うことがありますか」と問いかけが主体性につながる (e)

B児：「大きなお店にするぞー」園舎裏に向かって走っていく。

バーベキュー屋さんをしようと考えていたB児だったが、その日は雨どい遊びでビールケースのほとんどが使われていたため、道具が足りなくなっていた。そこで、保管して使われていなかったビールケース¹⁴の場所を伝え、一緒に手伝ったことで、B児はお客さんが来ることを想定したバーベキュー屋さんをつくることにつながった。担任は、ビールケースを取りに行く援助まで行ったが、その後、副担任がB児の遊びを見て話しかけ、店をつくるまでの援助¹⁵を行っていた。6月19日にもB児はバーベキューの店をつくったが、そこは、5歳クラス児の色水遊びと同様に、幼児が通れない池と店の間にB児が立っていて、客と店員の立ち位置がはっきり分かれているつくりだった。B児の遊びを見た他の幼児も一緒に加わり、園庭のベンチや机なども運んで大きな店が完成した。B児は副担任との会話の中で、店のイメージを膨らませていた。できあがった店を見て、たくさん幼児が店を訪れていた。

振り返りの話し合いで、副担任はB児の店に対するイメージの広がりには驚いていた。ビールケースとシートの並べ方にこだわり、店のイメージを膨らませながら置く位置を考える姿、素敵なバーベキュー屋さんにしようとする道具の種類や置き方を工夫し、黙々と準備する姿にB児は遊び込んでいるととらえたのである。そして、その要因として、ビールケースやレジャーシートを置くことによって作り出される遊びの「場」がポイントになっていることに気付いたのである。そして、それは新型コロナウイルス感染症対策によって遊びの環境が変化したことによって見えてきたものでもあった。ビールケースやレジャーシートが幼児の遊びにどのように取り入れられ、イメージ化されているのかを、担任と副担任が保育中や振り返りを通して共通理解¹⁶し、援助を行ってきたことが、B児の遊びの姿につながったと捉えた。

6月22日

D児が教師のところに来る。

D児：「先生、ぼくね、ビールケース欲しいの」

教師：「ビールケース？どんなふうに使いたいの？」

D児：「あのね、Bくんみたいにバーベキューごっこがしたいの。だからビールケース」

教師：「分かったよ。そういえばBくんのお店ってどんなだったかなあ¹⁷」

D児：「うーんとね、シート広げてね、そこにお店を建てたの」

教師：「シートか、やま組のシートもあるよ¹⁸」

D児：「いいね、ちょうだい」

教師と道具を準備する。

D児：「えっとね、ここにしようかな」

教師：「Dくん、どうしてここにするの¹⁹？」

D児：「ここはね、涼しいでしょ。それでね、みんなに見えるの」

教師：「へえ、確かにここならそら組さんもたくさん通るね。シートはどこに敷くの？」

D児：「ここ。ぼくはここに座るの」

教師：「なるほど、じゃあ、お客さんが来たら」

D児：「こっちに来るの。それで、ここに座るんだよ」

教師：「なるほど、じゃあ、こっちがお店の入り口かな²⁰？」

D児：「そうそう。あっ、じゃあ、ここに看板つくろう。先生、紙とペンください」

教師：「いいよ。持ってくるね」

B児のバーベキュー屋さん遊びから土日を挟んだ月曜日にD児が同じような遊びをしたいと話して来た。会話の内容から、B児の遊びがビールケースとレジャーシートを使っていることをD児はよく覚えていた。店をどこにつくるのか決める際、B児はテラス前の通りを選んでいて、なぜD児がそこを選んだのか分からなかったが、問いかける²¹うちに、そこが遮光シートの日陰の部分であることに気付いた。ビールケースやコンロなど、様々な道具を置いていたが、日陰からはみ出すことはなかった。幼児にとって、影の部分までが自分の店のスペースなのだと考えていたことに驚かされた。教師はバーベキューの店をつくるどころまで手伝

¹⁴ 日頃出していないものでも、幼児の求めに応じて用意することができる (a) 幼児の求める材料を準備する。しかしその場には場所だけ伝え、幼児自身が欲しいものを自分で準備するように仕向ける (g)

¹⁵ 日々の振り返りで、情報を共有しているからこそ、途中で援助に入る教師が交代してもスムーズに援助できている (b)

¹⁶ 担任副担任が振り返りの中で、援助の仕方や遊びの家庭、そのときの子どもたちの姿を伝え合うことで援助の方向性を確認していくことが大切 (f) 日々の振り返りタイムで援助の方向性が共有されている (e)

¹⁷ イメージが膨らむような言葉をさりげなくかける (e)

¹⁸ 使える材があることを知らせる (e)

¹⁹ 返答がイエス・ノーにならない問いかけ方が言葉力や思考する力の育ちにつながる (e)

²⁰ 広い空間に遊びの場をつくらせているので、店のイメージが具体的にることにつながる問いかけ (e)

²¹ 問いかけや対話を大切にしながら、幼児のしていることの意味を読み取りようとする。これが適切な援助に伝える (a)

っていたが、その後、別の幼児が「入れて」と加わり、遊びが発展していったことから、少し離れたところから見守る²²援助に切り替えることにした。手伝っていた幼児が日なたにケースを置こうとすると、D児は「そこ、お店じゃないよ。こっち」と置く位置を指定していた。

振り返りでは、特にお店屋さんごっこのような遊びに対して、幼児が遊びの「場」をイメージした空間を感覚的にもっているのではないかと伝えた。屋外特有の直線的、平面的、そして対称的ではない空間に対して、どのような遊びの「場」をつくるのかによっても、遊び²³の広がり方が変わることを確認した。

その後の幼児の遊びの姿を見ていると、様々なことに気付かされた。例えば、ピラミッド状に組まれたヒューム管でお家ごっこをして遊んでいた幼児は、3つのヒューム管の中を部屋割りすることで、自分の部屋としてスペースを確保していた。また、ビールケースを組み立てた秘密基地づくりでは、ケースを積み高さが低く、狭いお家ほど実は自分の空間として親しみを感じていた。幼児の遊びを平面的、空間的な範囲に注目して見ること、幼児の遊びのどこに面白さ²⁴を感じ、どのようなイメージをもっているのかを解釈できるようになってきたのである。

考察

以前、お茶の水女子大学附属幼稚園で保育を参観させていただいた際、半畳ほどの「ゴザ」という材に魅力を感じた。ゴザが床になり、天井になり、壁にもなるのである。遊んでいた幼児は、一緒につくる仲間に「ここかな」「だってさあ、ここだとね」など、常にイメージを共有するために声をかけながらお店をつくっていた。お店屋さんごっこの場合、そこで使う調理器具や商品などに注目しがちだが、幼児のイメージには見えない壁や屋根も含めた店そのものの「場」も存在する。それは、幼児がお店屋さんごっこを始める際に、これまで実際に連れて行ってもらった店や、テレビや絵本などで知った店のイメージを想像しているからではないか。遊戯室のような屋内なら比較的幼児のイメージももちやすいが、屋外の場合は、幼児の思い²⁵を読み取ってからのほうが、多様な援助を考えることができる。昨年、5歳クラス児が「ここは森のレストランだよ」と言って、大きな切り株を中心にお店を開いていたのを思い出した。屋外には大小様々な木々が植えられている。幼児はイメージに合った木を選んでその下にお店を開くかもしれない。ジャングルジム、砂場、ヒューム管などもお店の一部になる可能性がある。そして、風の当たる山の上や日よけの遮光シートが作り出す影さえも幼児にとってはお店をイメージするきっかけになるのである。幼児が何を見て、どんなお店のイメージを膨らませ、それを実現させようとしているのか、幼児の思考の読み取りが、確かな援助²⁶につながるかと考える。

4歳クラスになり、幼児は自分の遊びに没頭するだけでなく、他の幼児と思いを伝え合いながら遊ぶ姿が見られるようになってきた。遊んでいるイメージを自分のイメージに重ね、共有しているのである。VI期の年間指導計画では、「自分の考えを周りの友達や教師に伝え、イメージを共有し、大勢でかかわって遊ぶ」姿を大切にしている。教師が、幼児がもつ遊びのイメージを読み取り、遊んでいる幼児同士を仲介したり、一緒に遊ぶ幼児に伝えたりする²⁷。そうすることで、幼児はしたい遊びに夢中になり、また協同する面白さを感じ始めるようになる。そして、そのような遊びを繰り返すことで、幼児は人との関わり方に気づき、相手に分かるように話したり、お互いの意思や考えを共有したりする姿に育つことが期待できる。

今回は、ビールケースやレジャーシートを活用した遊びの「場」づくりが、幼児が没頭して遊ぶきっかけとなり、また遊びの幅の広がりにつながったと評価した。お店屋さんごっこについては、目を追うごとに教師が隣で一緒にかかわることが少なく²⁸なってきたと感じている。幼児の遊びをいかに読み取るかによって、過剰なかかわりを減らし、幼児同士のかかわりを増やすことに気付かされた。日々の幼児の姿を担任・副担任とで共有し、どのような援助を行うべきかを模索することが、幼児の遊び込む姿を支えることにつながっている。新型コロナウイルス感染症対策による新学期が始まって以降、園庭の環境は一変した。新しい環境の中だからこそ多くのことに気付かされた。まだまだ教師の援助が幼児の遊びにびったり寄り添っているとは考え難い。より遊びの本質を見抜き、一人一人の幼児の思いに合った環境設定と援助ができるよう保育を改善していく必要がある。

コメントの追加 [k2]: 幼児同士のかかわる姿を見て、あえて援助を控える、それが幼児同士の関わりを大切にしている援助であるという共感が多く得られた。

幼児同士のかかわりを大事にし、教師は「支える」ことを保育の柱にしている。かかわりから生まれる幼児の育ちを本園の職員は大切に、また期待していると感じた。

また、「見守る」ことも援助の一つと考えることに、多くの共感が得られた。常に幼児同士のかかわりを第一に考え、思いや願いを読み取ることは、次の援助の方向性を捉える時間としてとても大切な要素として位置付けている。遊びのどこに面白さがあるのか、じっくりと読み取ることは、保育者の心持ちを確かめ、ぶれない保育を行うことにもつながっていると感じる。

コメントの追加 [k3]: 教師主導の援助は余計なものという認識が共通理解されている。幼児が何に興味をもち、どう遊びをつくっていききたいのか、そのイメージを十分理解した上で援助を行うことを大切にしている。幼児の思いや願いを第一に考える姿勢であり、幼児が主体的に遊びにのめりこんでいけるようなきっかけづくりとしての保育である。

²² 幼児同士のかかわる姿を見て、あえて援助を控えるということを行う。それは、そのかかわりの中で育みたい姿をもっているから (a) 子ども同士のかかわりを見守ることも大切な援助 (f) 幼児の姿から、見守る援助に切り替えている (b) 幼児同士の関わりを大切にしている援助であり、幼児の遊びの姿を保育者がきちんと見て捉えているからこそできる援助が切り替えられる (g) 友達同士のかかわりを大切にしているからこそ、見守る援助に切り替えていく (e)

²³ 幼児それぞれの「場」の作り方によって、遊びの広がり方が異なり変わっていくことを振り返りて共通認識している。幼児みんなが同じ物で同じ遊びを共有することを求めている (g)

²⁴ 幼児の視線で遊びを捉えようとする姿勢 (a)

²⁵ 幼児の思いとそれを理解することを大切にしている。それを援助につなげている (b) 幼児の思い(幼児理解)を第一優先にした援助を考えている (g)

²⁶ 幼児の思い(幼児理解)を第一優先にした援助を考えている (g) 幼児の思いが第一優先 (b)

²⁷ ただ幼児同士をつなぐのではなく、遊びのイメージの読み取りが根底にあるからこそ、その後の遊びの発展につながる (e)

²⁸ 次第に子どもだけで遊びが続いていくように援助している。(b)

< 4歳クラス VII期 10~12月 > 「幼児の『やりたい』を支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルスの影響は依然として大きく、VII期でも感染を防ぐために、遊びは基本的に屋外で過ごすこととした。4歳クラス児はVI期と同様に、砂場で雨どい遊びを楽しんだり、ブランコやジャングルジムなどの運動遊び、生き物捕まえなどをしたりしながら過ごしていた。VI期でお店屋さんごっこのような幼児同士のかかわりを必然とする遊びを期待し、レジャーシートを活用した遊びの範囲づくりを援助してきたことで、ジュース屋さんごっこを屋外で楽しむ幼児が増えていた。そのような中で、市内の保育園の園長先生と研修をもつ機会があり、「幼児が安心して過ごすための場所づくり」についてお話をいただいた。4歳クラスの前は開けていて、遊びの場として捉えにくいのではないかと感じていた。そこで、日よけ用に利用していた簡易テントを4歳クラスの前の柱に固定し、設置することにした。すると、4歳クラス児がテントを見て「ここにしよう」とつぶやき、近くにあったテーブルやビールケースを運んでくるなどして、遊び場が出来上がったのである。さらにジュース屋さんごっこが広がりを見せていた時期でもあったことから、保育室の中にあった花紙やプラスチック容器、トレーなどの材料を窓のカウンター越しに移動させてお店を開くなど、保育室と外の遊びをつなげる場所にもなっていた。担任と副担任は振り返りで、環境構成がもたらす幼児の変容について毎日のように語り合っていた。

10月21日

5歳クラス児が副担任のもとにやってきた。「あわあわ遊びの道具ありますか？」副担任は、幼児が4歳クラスに在籍していた昨年度のことを思い出した。4歳クラス児の遊びにもつながると考え、副担任は教材庫からボウルや石鹸、泡立て器、おろし器などの道具を出して渡した。5歳クラス児は早速、4歳クラス前のテントに道具を並べ、泡づくりの準備を始めた。そこへ近くを通りかかったA児たちが声をかける。

A児：「何やっているの？」
5歳クラス児：「あのね、泡遊びだよ」
A児：「入れて」
5歳クラス児：「いいよ。これ、やる？」
A児：「分かった」
B児が副担任のところへやってくる。
B児：「これと同じなのください」
副担任：「いいよ。ちょっと待っててね」
5歳児：「あのね、水を入れるともっとあわあわするんだよ」
A児：「ほんとだ」

4歳クラス前のテントには、7名の幼児が集まり、5歳クラス児にやり方を聞きながら泡遊びを楽しんでいた。小さなテーブルの周りにはあつという間に人であふれ、幼児は寄り添いながら遊んでいた。振り返りでは、泡遊びに使っていた机を増やすかどうか話し合った。ここで話題に挙がったのは5歳クラス児の存在である。異年齢とのかかわりを期待していたこの時期、5歳クラス児が中心となり、遊びを「教えてもらう」ことに大きな魅力を感じていた。そこで、あえてスペースを増やさず、5歳クラス児を中心としたワークショップのような形をつくることできるように環境を構成することにした。

10月22日

A児：「入れて」
C児：「ねえ、どうやるの？」
5歳クラス児：「ここで石鹸をこするんだよ」
C児：「分かった」
D児：「わたしにも貸して」
C児：「ちょっと待ってて」石鹸を削り続ける。
5歳クラス児：「順番だからね」
D児：「じゃあ、これやるわ」水差しを手に持つ。
教師：「わあ、ふわふわになってきたね」
A児：「あのね、お水を入れて混ぜ混ぜするんだって」

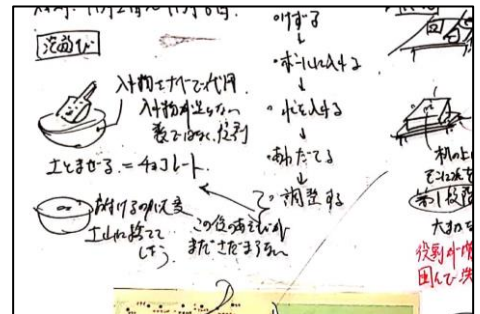
机の周りに人だかりができた。5歳クラス児に教えてもらいながら石鹸を削る幼児、水を入れて泡立てる幼児、順番を待っている幼児、そして何をしているのか興味津々に見ている幼児、様々な姿が見られた。教師はある程度の道具を出した後は、幼児の姿を見守ることに徹していた。「どうやるの？」と聞かれたら、5歳クラス児に聞いてみるよう促すようにした。道具の数がやりたい幼児の数に合わないことで、順番待ちが発

生したり、見ているだけの幼児がいたりしていた。振り返りで、実はそれが幼児の成長にとって、効果のあることではないかと話題になった。道具が「足りない」ことで待っている間に他の幼児の遊びを観察できたり、どうすれば折り合いをつけながら満足できる遊びにつながられるか考えたりすることができる。ただ欲しいと要求されたものを出すだけが適切な援助ではないことを確認することにつながった。

10月26日

E児：「泡遊びの道具ください」
教師：「いいよ。どうぞ」
F児：「一緒にやろう」
E児：「いいよ」
F児：「わたし、お水取ってくる」水盤の方へ駆け出す。
E児：「あわあわしてきた」
教師：「わあ、きれいな泡になってきたね。すごい」
F児：「もっと水入れようよ」水を入れて混ぜる。
教師：「わ、何だか泡が変わった」
E児の手が止まる。
E児：「もっと入れよう」
F児：「びちゃびちゃだ」
土山の土を持ってきて入れる。
E児：「先生、見て。チョコレートできた」
教師：「土を入れたの？本当だ。チョコレートみたいに茶色になったね」
しばらく土を入れた泡を混ぜる。
E児：「Fちゃん。わたしブランコ行ってくるね」

E児は土遊びが大好きな幼児である。天候に関係なく外に出ては土や砂で料理をつくったり、葉や実を飾って遊んだりしていた。泡遊びをしている幼児の姿に興味を惹かれたものの、初めて遊んだのは5日後だった。場所も4歳クラス前のテントから離れた「子どもの家」と呼ばれる小屋の中を使っていた。5歳クラス児はいなかったものの、やり方を見ていたのか、比較的慣れた手つきで石鹸を削り、泡立てていた。F児と役割を分担しながら泡をつくるE児の姿を見て、初めは泡ができていく様子をつぶやき、気付きを共有したり、遊びの様子を見守ったりすることに徹していた。しかし、泡に土を入れてチョコレートができたあたりから援助の必要性を感じ始めていた。泡ができたところまでは水や石鹸の加減や、混ぜ具合など、試行錯誤しながら遊ぶ様子を捉えることができたものの、土を入れてからは、「何か違う」といった具合で泡立てる事をやめてしまったのである。その現象は、テントの中で遊んでいた幼児も同様であった。幼児にとって泡ができてから砂と土を加えて混ぜたのは、たまたま近くにあったからではないか。そこで、振り返りで幼児が泡遊びを通して「やりたい事」は何かについて話し合った。石鹸を削る楽しさ、水を加えることによる泡立ち方の違い、かき混ぜればかき混ぜるほど泡立っていく面白さなど様々であるが、その後がぼやけている。もしかして料理など何かに見立ててみたいのではないか。その一助として土や砂に加えて、着色できるものがあればどうかという考えに至った。教師は、教材庫にあったクレヨンを用意し、幼児の願いに応じていつでも渡せるように準備しておくことにした。



11月2日

G児：「できた」
F児：「お水入れる？」
G児：「ううん」
しばらく泡立てる手が止まる。教師を見付け、走り出す。
G児：「先生、折り紙ください」
教師：「折り紙？何に使うのか教えてくれる？」
G児：「あのね、色水ジュースみたいにするの。色ペンでもいいよ」
教師：「なるほど、いいね。Gちゃんはあわあわに色を付けたいんだね」
G児：「そうそう」
教師：「わかったよ。Gちゃん。それで、どんな風にしたいのか、もう少し詳しく教えてくれる？」
G児：「あのね、折り紙を切って混ぜ混ぜするの。そしたらかき氷みたいに色がつくでしょ」

教師：「なるほど。泡の上からかけて色をつけたいんだね。わかった。そういえば、こんなものもあるよ。どうかな」クレヨンを見せる。
G児：「これ？面白そう。これにする」
クレヨンを手を持ち、おろし器で削り始める。
G児：「わあ、削れた。先生見て。粉みたい」
教師：「本当だ。泡に色が付いたね」
F児：「先生、わたしもクレヨンください」
教師：「いいよ。どの色にするかな」
F児：「わたし、紫色にする」
G児：「なんか、くっつく。これでやろう」
金属製のふるいを持ってきてクレヨンを削る。
F児：「ねえ、わたしのと混ぜてみたら」
G児：「いいね。混ぜよう混ぜよう」

10月26日の振り返りから、しばらくは泡遊びと土や砂、ドングリや落ち葉などを混ぜた料理が続いていた。泡立てもうまくいくと、次の日も泡の形が残り、食品サンプルのような面白さを感じることができた。教師が予想していた着色への要望は出てこなかったが、焦らずに幼児が求めてくるまで待つことにした。すると、11月2日になって初めてG児から色を付けたい願いを聞き取ることができた。G児は折り紙を求めていたが、「泡に色を付けたい」という願いが一致していることから、クレヨンを提示してみたところ、G児は興味を示し、使うことにした。クレヨンはおろし器で石鹸同様に簡単に削ることができた。粒状に泡に溶け込み、滑らかな色合いを示していた。しかし、油状の性質からおろし器にくっついてしまった。そこでふるいをつかって削ったところ、さらに細かくきれいに削ることができたものの、やはり削りカスがこびりついてしまった。その後、振り返りでクレヨンを使ったことの良さや課題について副担任と情報交換した。粒状に削れることの面白さをG児やF児は感じ、何度も削ったり混ぜたりして没頭していた。この魅力が変わらないように材を変えることができたらと考え、ホームセンターや百円ショップで新しい材を探したところ、絵画用のコンテが適していることに気付いた。コンテはクレヨンよりさらに粉状に削ることができ、手にこびりつくこともなく、洗浄が容易であることが分かった。早速、購入して幼児に提示したところ、非常に遊びが盛り上がった。泡がピンクや紫、黄色と変化するだけでなく、どのタイミングで色を付けるかでも面白さが異なることに気付き、泡遊びは11月の下旬になっても続くことにつながった。

泡遊びが日々続くと、幼児のやりたい思いも広がりを見せていた。これまで、教師が用意したプラスチック製のボウルの中でただ泡立っていたものが、フライパンや鍋の中で直接泡立ったり、ガラス容器にお玉で泡を入れ、そこにコンテで粉状の色を振りかけ、花を添えてスミージーのように見立てたりするなど、泡そのものを様々なものに見立てて遊ぶ姿が見られるようになった。つくった後のものは「取っておきたい」と願い、片付けずに4歳クラス前のテラスに陳列する様子からも、幼児のつくったものへの思いの深さを感じることができた。E児やF児は、雨の日も毎日欠かすことなく子どもの家で泡遊びを続けていた。

11月10日

E児：「先生、石鹸ください」
教師：「いいよ。どうぞ」
3歳クラス児：「ねえ、わたしもそれやりたい。入れて」
E児：「いいよ」
3歳クラス児：「どうやるの」
E児：「見てて」
おろし器で石鹸を削る。
E児：「やってみる？」
3歳クラス児：「うん」
しばらく交代しながら石鹸を削る。
教師：「わあ、ボウルに石鹸が溜まってきたね。上手上手。Eちゃん、3歳さんとっても上手にできたよ。さすがお姉さんだね」
E児：「今度、一緒に混ぜる？」
3歳クラス児：「やる」

毎日、同じ場所で泡遊びを続けるE児達の姿を見て、3歳クラスの幼児がやってきた。E児やF児はとまどいながらも、やり方を3歳クラス児に教えていた。5歳クラス児から伝承された遊びが3歳クラス児へとつながった瞬間であった。言葉は少なかったが、3歳クラス児は、泡遊びの面白さを一緒に遊びながら感じているようであった。3歳クラスの担任や副担任からも、年上の4歳クラス児の遊びに加わり、教えてもらうことの楽しさや魅力、成長の姿をカンファレンスや日々の職員室での会話の中で教えてもらえたことで、

遊びの面白さだけでなく、幼児理解や成長を捉えることにもつなげることができた。

担任と副担任は、毎日の振り返りを積み重ねながら、幼児理解を深めていた。泡遊びの何に面白さを感じているのか、どのような材や環境を求めているのか、日々話し合う中で、少しずつ環境構成を変化させていた。

<幼児理解に沿った環境構成の変化の例>

- ・テント下の机から見える位置にビールケースを置く。
- ・泡立てた道具についた石鹸カスを落とすためのコンテナを用意する。
- ・その日の泡遊びをした幼児の人数に合わせて道具の数を調整する。
- ・つくったものを陳列する棚（使っていないフラワースタンド）をテラスに置く。
- ・保育室からテントや子どもの家の様子が見えやすいように、窓際を整理する。

E児やF児は、毎日欠かさずことなく泡遊びに没頭していた。そして、友達と役割分担しながら、時にはやれないもどかしさを感じながらも、やりたい気持ちを具現化するために思いを伝え、遊びを工夫しながら続けていた。さらに、遊びの面白さを異年齢から教わり、伝えていく姿が見られた。この3つの姿から、E児達は遊び込んでいる姿であるととらえ、さらに援助と環境構成を更新していくことを振り返りの中で共通理解した。

12月17日

E児：「先生、コンテください」

教師：「コンテ？あわあわするのかな？何に使うのか教えてください」

E児：「あのね、色付けるの」

教師：「色？何に付けるのか、もう少し詳しく教えてくれる？」

E児：「雪。えっとね、雪でドーナツつくってるの。だからコンテで色を付けたいの」

教師：「なるほど、Eちゃんは雪でドーナツをつくってるんだ」

E児：「そう、だからコンテとゴシゴシするのをください」

教師：「わかったよ。ちょっと待っててね」

教材庫に保管していたコンテとふるいを持ってくる。

A児：「わたしにもください」

教師：「はい、どうぞ」

雪を固めたものの上からコンテを削る。

E児：「ぬれちゃった」

教師：「本当だね。雪が降っているとコンテは濡れちゃうんだね。どうしようか」

E児：「手袋いらない」

手袋を脱いだ手でコンテを持ち、直接雪にコンテを当てる。

A児：「あっ、色付いた。きれい。わたしもやろうっと」

泡遊びが始まってから2か月近くたち、園庭は雪景色となっていた。これまでE児達は、気温が低くなくても、雨が降っていても泡遊びは続けていたが、雪が降ったことで、それは止まってしまっていた。担任は、冬の環境整備作業が行われ、テントが撤去され、風除室が設置されたことを踏まえ、「さすがに、もう泡遊びをすることはないだろう」と泡遊びの道具を1セットだけ残し、教材庫にしまっていた。しかし、E児達の泡遊びに対する魅力はまた失われていなかったことに気付かされた。雪の中、E児達は腰を下ろし、ボウルに雪を入れ、泡立て器でかき混ぜ始めたのである。そして、コンテで着色をしようとしていた。泡遊びの楽しさが雪の中でも続いていたことに驚き、副担任と情報交換をするとともに、すぐに泡遊びの道具をテラスに戻すなど環境構成を変えることにした。教師は雪の降り始めの時期は滑る、投げると言った体感型の雪遊びからスタートすると予想していた。泡遊びに近い遊びが始まったことは、幼児にとって2か月近く続けるほど魅力的だったことが影響しているのではないか。次の日にはF児もコンテで雪を着色し、透明プラスチックのグラスに雪を入れて「かき氷」づくりをして楽しんでいた。遊びの内容は少し異なるが、泡遊びから雪遊びへとつながっていくことの面白さを感じることもできた。

考察

日々の保育を副担任とともに、そしてカンファレンスを通して振り返ることができたことで、E児の姿の変容を長期的に捉えることができた。E児は、どちらかというと一人でじっくり遊ぶことが好きな幼児で、集団の中に入っていきことにためらいがちな面があった。それが、泡遊びを通して、自分で場を選んで遊びを始めたこと、友達と役割分担しながらやりたい遊びを続けることができたこと、年下の幼児に遊びを教え、楽しめたこと、そして雪という別の材を使い、遊びを発展させていくことができた。その一つ一つの成長が、これまで行ってきた援助や環境構成の変化とかがわりがあると意味付けることができ、思いを支える保育の大切さを改めて実感した。

泡遊びが10月から12月の雪の降る中まで続いた要因は、幼児が面白いと感じたことを、担任と副担任が振り返りを通して話し合う中で理解し、適切な援助と環境構成を行うことができたことによるものであるととらえる。そして、それは、毎日の振り返りを通して少しずつ変化させてきたことが最大の要因であると考えられる。援助に迷うことは多々あったが、その都度副担任と情報交換し、互いに納得のいく方向へ修正していったこと、3歳クラスの担任など、他の職員とのカンファレンスを通して自分なりに納得しながら援助していったことの価値は非常に高い。

VII期の年間指導計画では、「葛藤経験を積み重ね、仲間とのイメージを共有しながら遊びを広げる」姿、そして、「異年齢児とのかかわりを通して、仲間との遊びを広げる楽しさを知る」姿を大切にしている。コロナ禍で外遊び中心の保育を続ける中、VII期は環境構成の変化がもたらす幼児の姿の変容を大きく感じることができた。遊びを一定にとらえず、常に幼児理解を深め、思いや願いに沿って援助していく。自分本位で保育を行うのではなく、カンファレンスを密に行い、主体的にも客観的にも保育をとらえ、納得しながら更新していくことの大切さに改めて気付かされた。

< 4歳クラス VII期 10~12月 > 「幼児の『やりたい』を支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルスの影響は依然として大きく、VII期でも感染を防ぐために、遊びは基本的に屋外で遊ぶこととした。4歳クラス児はVI期と同様に、砂場で雨どい遊びを楽しんだり、ブランコやジャングルジムなどの運動遊び、生き物捕まえなどをしたりしながら過ごしていた。VI期でお店屋さんごっこのような幼児同士のかかわりを必然とする遊びを期待し、レジャーシートを活用した遊びの場づくりを援助してきたことで、ジュース屋さんごっこを屋外で楽しむ幼児が増えていた。そのような中で、市内の保育園の園長先生と研修をもつ機会があり、「幼児が安心して過ごすための場所づくり」についてお話をいただいた。⁴4歳保育室の前は開けていて、遊びの場として捉えにくいので「はないか」と感じていた。そこで、¹日よけ用に利用していた簡易テントを4歳クラスの前の柱に固定し、設置することにした。すると、4歳クラス児がテントを見て「ここにしよう」とつぶやき、近くにあったテーブルやビールケースを運んでくるなどして、自分たちで場を整える姿があった。さらにジュース屋さんごっこが広がりを見せていた時期でもあったことから、保育室の中にあった花紙やプラスチック容器、トレーなどの材料を窓のカウンター越しに移動させてお店を開くなど、保育室と外の遊びをつなげる場所にもなっていた。²担任と副担任は振り返りで、環境構成がもたらす幼児の変容について毎日のように語り合った。

コメントの追加[]:遊びの場づくりとしての簡易テントの設置であることに共感が多かった。幼児の「やりたい」を支える前提として、幼児が安心して遊ぶことのできる場が必要であることの共通認識となった。

10月21日

5歳クラス児が「³あわあわ遊びの道具ありますか?」と、副担任のもとにやってきました。副担任は、この幼児が4歳クラスに在籍していた昨年度のことを思い出した。⁴4歳クラス児の遊びにもつながると考え、副担任は教材庫からボールや石鹸、泡立て器、おろし器など、必要な道具を尋ねて出した。5歳クラス児は早速、4歳クラス前のテントに道具を並べ、泡づくりの準備を始めた。そこへ近くを通りかかったA児たちが声をかける。

A児:「何やっているの?」
5歳クラス児:「あのね、泡遊びだよ」
A児:「入れて」
5歳クラス児:「いいよ。これ、やる?」
A児:「分かった」
B児が副担任のところへやってくる。
B児:「これと同じなのください」
副担任:「いいよ。ちょっと待っててね」
5歳児:「あのね、水を入れるともっとあわあわするんだよ」
A児:「ほんとだ」

4歳クラス前のテントには、7名の幼児が集まり、5歳クラス児にやり方を聞きながら泡遊びを楽しんでいた。小さなテーブルの周りにはあつという間に人であふれ、幼児は寄り添いながら遊んでいた。振り返りでは、⁵泡遊びに使っていた机を増やすかどうか話し合った。ここで話題に挙がったのは5歳クラス児の存在である。異年齢とのかかわりを期待していたこの時期、⁶5歳クラス児が中心となり、遊びを「教えてもらう」ことに大きな魅力を感じていた。そこで、⁷あえてスペースを増やさず、5歳クラス児を中心としたワークショップのような形をつくることできるように環境を構成することにした。

コメントの追加[]:遊びたい幼児が増えているにもかかわらず、あえて遊びの場所を増やさない。それが異年齢とのかかわりを大切にしていることへの共感につながった。よかれと思って、どんどん援助していくことは、実は幼児同士のかかわりを深めることから遠ざかってしまうことがある。「援助しない援助」は附属幼稚園で浸透している。

10月22日

A児:「入れて」
C児:「ねえ、どうやるの?」
5歳クラス児:「ここで石鹸をこするんだよ」

¹ 教師の工夫1つで幼児にとって「良い場」となり、泡遊びが発展するきっかけになったのだと感じた(f) 遊びの場として捉えにくいという迷いから、新たな環境を用意している。安心して遊べる場になっている。幼児の目線で環境を更新している(e) (b)

² 環境を用意して終わりではなく、それが子どもの遊びにどう影響したかを振り返り、次につなげている(b) サイクルをずっと回し続けている(a)

³ 4歳クラスに行けばできるかも=やりたいことができる環境。遊びが受け継がれていくきっかけになっている(b)

⁴ 年上の幼児から遊びが伝わり、広がっていくきっかけになっている(b) 多面的に援助を考えている(e)

⁵ 複数で相談する事を大切にしている(e)

⁶ 幼児同士のかかわりの中で遊ぶ良さ、価値を教師が把握している。だからこそ、「つなぐ」という援助を大切にしている(a)

⁷ 5歳から教わりやすいようにと意図をもった環境づくりを行っている(g) 異年齢のかかわりがうまれるきっかけになっている。5歳、4歳双方にとって良い経験になっている(b) 4歳クラス児の育ちにとっての価値を踏まえて環境を構成する(e)

C児：「分かった」
 D児：「わたしにも貸して」
 C児：「ちょっと待ってて」おろし器で石鹸を削り続ける。
 5歳クラス児：「順番だからね」
 D児：「じゃあ、これやるわ」水差しを手を持つ。
 教師：「わあ、ふわふわになってきたね」
 A児：「あのね、お水を入れて混ぜ混ぜするんだって」

机の周りに人だかりができた。5歳クラス児に教えてもらいながら石鹸を削る幼児、水を入れて泡立てる幼児、順番を待っている幼児、そして何をしているのか興味津々に見ている幼児、様々な姿が見られた。⁸教師はある程度の道具を出した後は、幼児の姿を見守ることに徹していた。⁹「どうやるの?」と聞かれたら、5歳クラス児に聞いてみるよう促した。道具の数がやりたい幼児の数に合わないことで、順番待ちが発生したり、見ているだけの幼児がいたりしていた。振り返りで、実はそれが幼児の成長にとって、効果のあることではないかと話題になった。¹⁰道具が「足りない」ことで待っている間に他の幼児の遊びを観察できたり、どうすれば折り合いをつけながら満足できる遊びにつなげられるか考えたりすることができる。ただ欲しいと要求されたものを出すだけが適切な援助ではないことを確認することにつながった。

10月26日

E児：「泡遊びの道具ください」
 教師：「いいよ。どうぞ」
 F児：「一緒にやろう」
 E児：「いいよ」
 F児：「わたし、お水取ってくる」水盤の方へ駆け出す。
 E児：「あわあわしてきた」
 教師：「わあ、きれいな泡になってきたね。すごい」
 F児：「もっと水入れようよ」水を入れて混ぜる。
 教師：「わ、何だか泡が変わった」
 E児の手が止まる。
 E児：「もっと入れよう」
 F児：「びちゃびちゃだ」
 土山の土を持ってきて入れる。
 E児：「先生、見て。チョコレートできた」
 教師：「土を入れたの?本当だ。チョコレートみたいに茶色になったね」
 しばらく土を入れた泡を混ぜる。
 E児：「Fちゃん。わたしブランコ行ってくるね」

E児は土遊びが大好きな幼児である。天候に関係なく外に出ては土や砂で料理をつくったり、葉や実を飾って遊んだりしていた。泡遊びをしている幼児の姿に興味を惹かれたものの、初めて遊んだのは5日後だった。場所も4歳クラス前のテントから離れた「子どもの家」と呼ばれる小屋の中を使っていた。5歳クラス児はいなかったものの、やり方を見ていたのか、比較的慣れた手つきで石鹸を削り、泡立てていた。F児と役割を分担しながら泡をつくるE児の姿を見て、¹¹初めは泡ができていく様子をつぶやき、気付きを共有したり、遊びの様子を見守ったりすることに徹していた。しかし、泡に土を入れてチョコレートができたあたりから別の援助の必要性を感じ始めていた。泡ができたところまでは水や石鹸の加減や、混ぜ具合など、試行錯誤しながら遊ぶ様子を捉えることができたものの、土を入れてからは、「何か違う」といった具合で泡立てる事をやめてしまったのである。その現象は、テントの中で遊んでいた幼児も同様であった。幼児にとって泡ができてから砂と土を加えて混ぜたのは、たまたま近くにあったからではないか。そこで、¹²振り返りで幼児が泡遊びを通して「やりたい事」は何かについて話し合った。石鹸を削る楽しさ、水を加えることによる泡立ち

コメントの追加[3]:遊びを支えるために、あえて道具を減らす援助に多くの共感を得た。少ないことで道具の貸し借りや順番、共同で使う姿が期待できる。幼児同士のかかわりを深める要因となることに共感を得たのではないか。

⁸ 教師が教えるのではなく、年上の幼児や幼児同士で教え合うきっかけになっている(b)

⁹ 幼児同士のかかわりを大切に(e)(g)

¹⁰ 道具がたくさんあるから良いという訳ではなく、足りないからこそできる事もあるのだと感じた(f) 無い中でどうするか幼児が考えるチャンスとなる(g) 言葉で伝え合ったり、譲り合ったり役割分担したりする姿につながる(b) 道具の数も大事な環境構成。(e)遊びの盛り上がりや幼児においても違ってくるのだろう。待つ事で冷静に遊びに向かえるようになつたり、思考を働かせたりする幼児の姿も見られる(a)

¹¹ まずは遊びの様子をよく見て場を捉え、必要なタイミングで援助をしている(b) 初めてやってみた幼児に寄り添った援助(e)

¹² 幼児自身の思いを大切にしている。幼児の姿の内面を捉え、それをもとに援助を考える(a)

方の違い、かき混ぜればかき混ぜるほど泡立っていく面白さなど様々であるが、その後がぼやけている。¹³もしかして料理など何かに見立ててみたいのではないか。その一助として土や砂に加えて、着色できるものがあればどうかという考えに至った。教師は、教材庫にあったクレヨンを用意し、¹⁴幼児の願いに応じていつでも渡せるように準備しておくことにした。

11月2日

G児：「できた」
F児：「お水入れる？」
G児：「ううん」
しばらく泡立てる手が止まる。教師を見付け、走り出す。
G児：「先生、折り紙ください」
教師：「折り紙？何に使うのか教えてくれる？」
G児：「あのね、色水ジュースみたいにするの。色ペンでもいいよ」
教師：「なるほど、いいね。¹⁵Gちゃんはあわあわに色を付けたいんだね」
G児：「そうそう」
教師：「わかったよ。Gちゃん。それで、**どんな風にしたいのか、もう少し詳しく¹⁶教えてくれる？**」
G児：「あのね、折り紙を切って混ぜ混ぜするの。そしたらかき氷みたいに色がつくでしょ」
師：「なるほど。泡の上からかけて色をつけたいんだね。わかった。そういえば、こんなものもあるよ。どうかかな」クレヨンをG児に見せる。
G児：「これ？面白そう。これにする」
クレヨンを手に持ち、おろし器で削り始める。
G児：「わあ、削れた。先生見て。粉みたい」
教師：「本当だ。泡に色が付いたね」
F児：「先生、わたしもクレヨンください」
教師：「いいよ。どの色にするかな」
F児：「わたし、紫色にする」
G児：「なんか、くつつく。これでやろう」
金属製のふるいを持ってきてクレヨンを削る。
F児：「ねえ、わたしのと混ぜてみたら」
G児：「いいね。混ぜよう混ぜよう」

10月26日の振り返りからしばらくは泡遊びと土や砂、ドングリや落ち葉などを混ぜた料理が続いていた。泡立てもうまくいくと、次の日も泡の形が残り、食品サンプルのような面白さを感じることができた。教師が予想していた着色への要望は出てこなかったが、**「焦らずに幼児が求めてくるまで待つことにした。」**すると、11月2日になって初めてG児から色を付けたい願いを聞き取ることができた。G児は折り紙を求めていたが、「泡に色を付けたい」という願いが一致していることから、クレヨンを提示してみたところ、G児は興味を示し、使うことにした。クレヨンはおろし器で石鹸同様に簡単に削ることができた。粒状に泡に溶け込み、滑らかな色合いを示していた。しかし、油状の性質からおろし器にくっついてしまった。そこでふるいを使って削ったところ、さらに細かくきれいに削ることができたものの、やはり削りくずがこびりついてしまった。その後、振り返りでクレヨンを使ったことの¹⁸良さや課題について副担任と情報交換した。粒状に削れることの面白さをG児やF児は感じ、何度も削ったり混ぜたりして没頭していた。¹⁹この魅力が変わらないように材を変えることができたらと考え、絵画用のコンテが適していることに気付いた。コンテはクレヨンよりさらに粉状に削ることができ、手にこびりつくこともなく、洗浄が容易であることが分かった。早速、幼児に提示したところ、非常に遊びが盛り上がった。泡がピンクや紫、黄色と変化するだけでなく、どのタイミングで色を付けるかでも面白さが異なることに気づき、泡遊びは11月の下旬になっても続くことにつながった。

コメントの追加[4]:すぐに道具を出さない援助に多くの共感を得た。これも、教師の脱「よかれ」である。幼児が必要感をもって声を掛けてくるまで、またそれが幼児の視界に入った時に必要だと感じた時に道具を手にする意味がある。環境構成に近い援助と言えるのではないか。

コメントの追加[5]:材が欲しいと言われた時に、すぐに渡さず、意図を問うことに多くの共感を得た。何に使うのか、どのように使うのかを聞き出すことで、幼児の思いや願い、何に面白さを感じているのかが分かり、より適切な援助につながる。

コメントの追加[6]:これも教師の脱「よかれ」に共感を得たものだと考えている。じっくり日をまたいで遊びを継続できる環境であるからこそできる援助である。幼児の必要感を大切にしたい援助である。

¹³ 違うかもしれないが、積極的に提案していこうという姿勢だけが必要だと感じる (a) (e)

¹⁴ すぐに出すのではなく、幼児のタイミングに合わせている (g) 幼児の姿を予想し、事前に環境を整えている (b) (f)

¹⁵ 幼児の思いを言葉にすることで、やりたい事がはっきりする。教師と幼児のイメージも同じになる (b)

¹⁶ 幼児の思いをじっくり聞く (g) 読み取りのためでもあり、伝えようとする言葉の力を育む事につながる言葉掛け。こう問うことで、幼児が自分のイメージを言葉で伝える。この言葉にして伝えるかは幼児同士のかかわりでも必要 (a) (e)

¹⁷ あくまでも幼児主体。教師主導にならず、子どもが「やりたい」となるのを待っている (b) 自分の捉えが違ったとしても、それに合わせようとせず、こだわらない姿勢、それが幼児主体の遊びにつながる (a) (e)

¹⁸ 良さだけでなく、課題についても触れる事で、よりよい方法を考える事ができる (b) 教師も日々模索している (e)

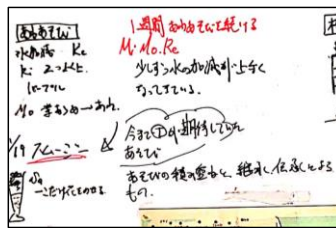
¹⁹ 材の何に惹かれたのか読み取り、援助に活かそうとする (a)

²⁰泡遊びが日々続くと、幼児のやりたい思いも広がりを見せていた。これまで、教師が用意したプラスチック製のボウルの中でただ泡立てていたものが、フライパンや鍋の中で直接泡立てたり、ガラス容器にお玉で泡を入れ、そこにコンテで粉状の色を振りかけ、花を添えてスムージーのように見立てたりするなど、泡そのものを様々なものに見立てて遊ぶ姿が見られるようになった。つくった後のものは「取っておきたい」と願い、片付けずに4歳クラス前のテラスに陳列する様子からも、幼児のつくったものへの思いの深さを感じることができた。E児やF児は、雨の日も毎日欠かすことなく子どもの家で泡遊びを続けていた。

11月10日

E児：「先生、石鹸ください」
 教師：「いいよ。どうぞ」
 3歳クラス児：「ねえ、わたしもそれやりたい。入れて」
 E児：「いいよ」
 3歳クラス児：「どうやるの」
 E児：「見せて」
 おろし器で石鹸を削る。
 E児：「やってみる？」
 3歳クラス児：「うん」
 しばらく交代しながら石鹸を削る。
 教師：「わあ、ボウルに石鹸が溜まってきたね。上手上手。Eちゃん、3歳さんとっても上手にできたよ。
²¹さすがお姉さんだね」
 E児：「今度、一緒に混ぜる？」
 3歳クラス児：「やる」

毎日、同じ場所で泡遊びを続けるE児達の姿を見て、3歳クラス児がやってきた。E児やF児は戸惑いながらも、やり方を3歳クラス児に教えていた。5歳クラス児から伝承された遊びが3歳クラス児へとつながった瞬間であった。言葉は少なかったが、3歳クラス児は、泡遊びの面白さを一緒に遊びながら感じているようであった。²²3歳クラスの担任や副担任からも、年上の4歳クラス児の遊びに加わり、教えてもらうことの楽しさや魅力、成長の姿をカンファレンスや日々の職員室での会話の中で教えてもらえた。遊びの面白さだけでなく、幼児理解や成長を捉えることにもつなげることができた。



担任と副担任は、毎日の振り返りを積み重ねながら、幼児理解を深めていた。泡遊びの何に面白さを感じているのか、どのような材や環境を求めているのか、日々話し合う中で、少しずつ環境構成を変化させていた。

²³<幼児理解に沿った環境構成の変化の例>

- ・テント下の机から見える位置にビールケースを置く。
- ・泡立てた道具についた石鹸カスを落とすための水を張ったコンテナを用意する。
- ・その日の泡遊びをした幼児の人数に合わせて次の日の道具の数を調整する。
- ・つくったものを陳列する棚（使っていないフラワースタンド）をテラスに置く。
- ・保育室からテントや子どもの家の様子が見えやすいように、窓際を整理する。

E児やF児は、その後も毎日欠かすことなく泡遊びに没頭していた。そして、友達と役割分担しながら、時にはやれないもどかしさを感じながらも、やりたい気持ちを具現化するために思いを伝え、遊びを工夫しながら続けていた。さらに、遊びの面白さを異年齢から教わり、伝えていく姿が見られた。この3つの姿から、E児達は遊び込んでいる姿であるととらえ、さらに援助と環境構成を更新していくことを振り返りの中で共通理解した。

12月17日

E児：「先生、コンテください」
 教師：「コンテ？あわあわするのかな？何に使うのか教えてください」
 E児：「あのね、色付けるの」
 教師：「色？何に付けるのか、²⁴もう少し詳しく教えてくれる？」

²⁴ したいことを読み取りながら幼児が伝える事で言葉の力の育ちを支えている(e)

E児：「雪。えっとね、雪でドーナツつくってるの。だからコンテで色を付けたいの」

教師：「なるほど、Eちゃんは雪でドーナツをつくってるんだ」

E児：「そう、だからコンテとゴシゴシするのをください」

教師：「わかったよ。ちょっと待っててね」

教材庫に保管していたコンテとふるいを持ってくる。

A児：「わたしにもください」

教師：「はい、どうぞ」

雪を固めたものの上からコンテを削る。

E児：「濡れちゃった」

教師：「本当だね。雪が降っているとコンテは濡れちゃうんだね。どうしようか」

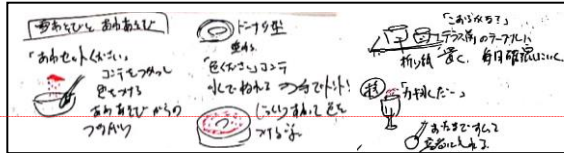
E児：「手袋いらない」

手袋を脱いだ手でコンテを持ち、直接雪にコンテを当てる。

A児：「あっ、色付いた。きれい。わたしもやろうっと」

泡遊びが始まってから2か月近くたち、園庭は雪景色となっていた。これまでE児達は、気温が低くなっても、雨が降っていても泡遊びは続けていたが、雪が降ったことで、それは止まっていた。担任は、冬の環境整備作業が行われ、テントが撤去され、風除室が設置されたことを踏まえ、「さすがに、もう泡遊びをすることはないだろう」とコンテ以外の²⁶泡遊びの道具を1セットだけ残し、教材庫にしまっていた。しかし、E児達の泡遊びに対する魅力はまだ失われていなかったことに気付かされた。雪の中、E児達は腰を下ろし、ボールに雪を入れ、泡立て器でかき混ぜ始めたのである。そして、コンテで着色をしようとしていた。泡遊びの楽しさが雪の中でも続いていたことに驚き、**副担任と情報交換をするとともに、²⁷すぐに泡遊びの道具をテラスに戻すなど環境構成を変えることにした。**教師は雪の降り

始めた時期は、滑る、投げると言った体感型の雪遊びからスタートすると予想していた。泡遊びに近い遊びが始まったことは、幼児にとって2か月近く続けるほど魅力的だったことが影響しているのではないか。次の日にはF児もコンテで雪を着色し、透明プラスチックのグラスに雪を入れて「かき氷」づくりをして楽しんでた。遊びの内容は少し異なるが、泡遊びから雪遊びへとつながっていくことの面白さを感じることができた。



コメントの追加[7]: 幼児の願いに応じて柔軟に環境構成を変えていくことに多くの共感を得た。遊びが終わったと感じてもすぐに片付けず、援助のタイミングを逃さないようアンテナを張っておくことも教師の援助の一つであると考えている。

考察

²⁷日々の保育を副担任とともに、そして他のクラスの教師と行うカンファレンスを通して振り返ったことで、**幼児の姿の変容を長期的に捉えることができた。**特にE児は、どちらかというとな人でじっくり遊ぶことが好きな幼児で、集団の中に入っていくことにためらいがちな面があった。それが、泡遊びを通して、自分で場を選んで遊びを始めたこと、友達と役割分担しながらやりたい遊びを続けたこと、**年下の幼児に遊びを教え、楽しめたこと、そして雪という別の材を使い、遊びを発展させていくことができた。**²⁸**その一つ一つの成長が、これまで行ってきた援助や環境構成の変化とかかわりがある**と意味付けることができ、思いを支える保育の大切さを改めて実感した。

泡遊びが10月から12月の雪の降る中まで続いた要因は、**幼児が面白いと感じたことを、担任と副担任が振り返りを通して話し合う中で理解し、適切な援助と環境構成を行うことができたこと**によるものだととらえる。そして、それは、²⁹**毎日の振り返りを通して少しずつ変化させてきた**ことが最大の要因であると考

コメントの追加[8]: 非常に長いスパンで援助・環境構成と幼児の成長を結び付けていることに共感を得たのではないか。幼児の姿から見えたことを、継続した見取りの中で意味付け、成長を捉えていくことの大切さを全職員が感じていると言える。

²¹ 自己有用感につながる言葉掛け(e)

²² 他クラスの教師との共有・情報交換(g) 異年齢が関わって遊ぶ風土がある中で、その意味を互いに共有し合う。それぞれの発達段階において前向きにとらえ、保育しようとしている(a)

²³ 視覚化を図り、遊びの継続や広がりにつながる環境構成(e) 幼児の主体性を大切にした援助を積極的に行っている(a)

²⁴ したいことを読み取りながら幼児が伝える事で言葉の力の育ちを支えている(e)

²⁵ それでも「まだ使わかも・・・」と残しておく。幼児の思いを広く受け止め、対応できるようにしている。それも雪での色付け遊びにつながった要因(a)

²⁶ 幼児の遊びにより、合わせている(g) 幼児の思いを大切にして、援助のタイミングを逃さない(e) (b)

²⁷ 長い目で幼児の育ちを捉え、支えている(b)

²⁸ 自らの保育と幼児の育ちを長期的に捉えている(e) 幼児の姿やしていることの内面を読み取って援助を行ってきたからこそ、その関係をしっかりとりえている(a) (b)

²⁹ 保育の評価を次の援助へつなげるサイクルを大切にしている(e)

える。援助に迷うことは多々あったが、³⁰その都度副担任と情報交換し、互いに納得のいく方向へ修正していったこと、³¹3歳クラスの担任など、他の職員とのカンファレンスを通して自分なりに納得しながら援助していったことの価値は非常に高い。

VII期の年間指導計画では、「葛藤経験を積み重ね、仲間とのイメージを共有しながら遊びを広げる」姿、そして、「異年齢児とのかかわりを通して、仲間との遊びを広げる楽しさを知る」姿を大切にしている。コロナ禍で外遊び中心の保育を続ける中、VII期は環境構成の変化がもたらす幼児の姿の変容を大きく感じることができた。³²遊びを一定にとらえず、常に幼児理解を深め、思いや願いに沿って援助していく。自分本位で保育を行うのではなく、カンファレンスを密に行い、主体的にも客観的にも保育を捉え、納得しながら更新していくことの大切さに改めて気付かされた。

³⁰ 副担任との共有(g) 迷いをその都度共有し、援助に生かしている(b)

³¹ 複数での保育、多様な考えを大切にする姿勢(e)

³² 幼児の姿をよく見て、思いや願い、主体性を大切にしている(b)

<4歳クラス Ⅷ期 2月> 「環境構成で『やりたい』を支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、これまで、遊びの多くを屋外で行ってきた。保育室や遊戯室での遊びも行われてきたが、昨年度のようにお店屋さんごっこなどで使われた道具を残すといったことをしなかった。そのため、衣装づくりやショーごっこなどの遊びが、例年に比べて少ないと感じていた。反面、異年齢の遊びの交流が増え、年上の幼児から遊びを「教わる」、そして、年下の幼児に遊びを「教える」姿が多くみられるようになった。

Ⅷ期に入ると、近年稀にみる大雪の影響により、幼児のほとんどが室内で過ごす日が増えていた。カプラ、一輪車、フラフープなど、Ⅷ期の環境構成によって出された遊びに没頭する姿が見られるようにもなっていた。そうした中、毎年2月に行われる「お楽しみ発表会」が近づき、教師は幼児が遊びの何に着目し、おもしろいと感じて遊んでいるのかを読み取りながら保育を行っていた。本園の発表会は「やりたいことの発表」として位置付けられている。担任は副担任と声をかけ合い、誰がどのような遊びに目を向けているのかを情報共有しつつ、保育を行っていた。

そのような中で、教師は一人で遊ぶM児の姿に気がついた。M児はプリンセスや変身ヒロインなどが好きで、ビニール袋で製作した衣装を着て遊ぶことが多かった幼児である。特に今年大ヒットしたアニメのキャラクターに扮するべく、緑の折り紙を口に咥え、ヒロインになりきって遊んでいた。前期につくった衣装はそのまま保育室に保管し、いつでも着ることができるようにしてあったが、Ⅷ期に入ってから一度も着る様子がなかった。担任は、副担任との振り返りの中で、「衣装がそこにあることで、もう一度新しくつくることができなくなっているのではないか」と話題にした。そこで、衣装の保管場所をすべて移動し、整理してみることとした。すると、次の日、M児が担任に話しかけてきた。

2月2日

M児：「先生、ピンクのビニール袋ください。あと、折り紙はどこかなあ」

教師：「ビニール袋？何に使うのか教えてくれる？」

M児：「あのね、ねずこの衣装をつくるの」

教師：「ねずこ？分かったよ。Mちゃん、ねずこ大好きだったね。他に欲しいものがあったら教えてね」

M児：「あとね、黒いビニール袋」

教師：「黒？ねずこって黒かったっけ？Nちゃん、知ってる？」

N児：「え～何だろう。あつ、分かった。上に着るやつじゃない？」タブレットPCに映されたキャラクターの衣装を見る。

M児：「そうそう、先生、だから黒いビニール袋ください」

教師：「教えてくれてありがとう。じゃあ、持ってくるね」

しばらく衣装づくりを行うM児。

M児：「先生、ちょっとここ持ってて」

教師：「いいよ。ここでいいかな。おお、Mちゃん、こここのところを切るんだ」ビニール袋を真ん中から2つに切断する。

M児：「そうそう。これをね、肩に付けるの」

教師：「なるほど、面白いね。Nちゃん、Mちゃんがどんどんねずこになっていくね」

N児：「これ、肩から取れちゃうんじゃない？」

M児：「えっ、ちょっと先生、付けるからここ持っててください」

教師：「いいよ。本当だ、ここNちゃんの言った通り外れちゃうみたいだよ」

N児：「テープ付けたら」

M児：「あつ、じゃあテープ持ってくる」

しばらくN児と2人で色の違う2つの衣装をつなぎ合わせる。

M児：「できた。先生見てみて」

教師：「いいね。すてきななあ。ねずこそっくりだよ」

N児：「後ろどうなってるの？」M児の背中を見る。

M児：「こんなのよ。どう？」両肩の黒いビニール袋の切れ間の背中部分をさする。

N児：「いいね」

担任は驚いた。衣装を移動させたその日に「衣装をつくりたい」と話しかけてきたからである。ヒロインになりきる遊びは「なりきるまでの楽しさ」と「なりきって遊ぶ楽しさ」の2つの魅力があると理解している。振り返ると、M児はこれまでも同じアニメキャラクターの衣装をつくり、ハンガーにかけて保存していた。そして、それを着てなりきり遊びを楽しむ姿は見えるものの、遊びに没頭する様子は、衣装づくりの方が圧倒的に多かったと感じている。今回、これまでの衣装を整理したことで、M児の心に「また、新しい衣装をつ

くりたい」という気持ちが湧き上がったのだろう。環境構成がもたらす影響力の大きさを実感した瞬間だった。M児はこれまでつくっていた衣装とは異なり、黒のビニール袋をつなぎ合わせたいと願っていた。担任はそれが何を意味するのか分からず、詳細を知りたい思いと、遊びを他の幼児に広げたい思いから、N児に尋ねてみた。タブレットPCで検索しながら確認した「上に着るやつ」とは羽織物のことだと理解した。しかし、本来、「羽織るもの」であって、2つに分かれているものではない。しかし、タブレットPCにあるキャラクターの画像を見て気付いた。羽織物の裏が見えず、マフラーのように肩にかけているにも見えたからである。N児も同様に理解しているようであったことから、担任は特に正確な羽織物の形を知らせることをしなかった。M児がやりたいことは精巧な衣装をつくることではなく、キャラクターになりきることだったからである。N児もその後、衣装づくりに必要な材料が欲しいと担任に伝え、M児とキャラクターの特徴などについて話しながらつくっていた。

M児とN児は衣装ができあがると、嬉しそうに遊戯室に出かけ、友達や教師に見せに行っていた。その後衣装を見せるだけでなく、ポーズをとったり歌を口ずさんだりする姿を見て、担任と副担任は「より思い通りの衣装ができあがったことで、今度は『なりきって遊ぶ』を楽しみたいと思いはじめたのではないかと考えた。そこで、環境構成として、幼児がつくったものをショーごっこのようになりきって遊ぶ「場」を用意することで、「なりきって遊びたい」を支えることにつながるのではないかと考えた。

2月10日①

N児：「ねえ、どこでやる？」
M児：「いいところないかなあ」 遊戯室を見渡す。保育室前に置かれていた台を見付ける。
M児：「これなに？」
N児：「台みたい。乗ってもいいかなあ」
しばらく台の上に立ち、遊戯室を見回す。
N児：「Mちゃん、これいいね。ここで歌えるんじゃない？」
M児：「いいね。歌欲しいなあ」 教師を探す。
N児：「先生、歌かけるやつ出して」
教師：「CDラジカセのことかな？ねずこさん、どんなことをしたいの？詳しく教えてくれる？」
M児：「あのね、鬼滅の歌で歌いたい」
教師：「なるほど、分かったよ。待っててね」 CDラジカセを台の横に用意する。
遊戯室に音楽が流れる。
O児：「Mちゃん、入れて」
M児：「いいよ。じゃあ、Oちゃんこっちね」
教師：「Nちゃん、素敵だね。楽しそう。ねえ、Nちゃん、先生もこの辺で見ていいかな？」 台の前に観客のように座る。
N児：「いいよ。あっ、分かった。椅子持ってくる」 保育室から幼児用の椅子を持ってきて並べる。
O児：「私も持ってくる」
P児Q児R児：「入れて」
M児：「いいよ。でも入らないよ」
Q児：「ちょっと、ここ狭い」
P児：「じゃあ、順番ね。ここにしよう」 台の後ろのスペースに並んで座る。
R児：「じゃあさ、私たちの番になったら・・・」 P児と相談する。
3歳クラス副担任：「ねえねえ、やま組さん何かやってるよ。見に行きましょうよ」
N児：「ここ座っていいよ」
M児：「鬼滅のショーがはっじまるよ〜」

ここでは、環境構成としてショーごっこなどで使うミニステージ台を一つ遊戯室の隅に置いておいた。必要があれば使うだろうとそっと用意したものだったが、それがM児達の「なりきって遊びたい」という願いにつながった。M児達はイメージが膨らんだのか、CDラジカセが置かれ、音楽がかかり、椅子が並んで観る幼児ができるなど、次々と遊びを広げていった。たまたま移動させた台の後ろが少し空いていたことで、そこが次の順番待ちの場所にもなっていた。みるみる幼児が増え、踊ったり拍手したりし始める。ある幼児は空き箱に穴を空けて小さな箱をつなげ、それをカメラに見立てて撮影する真似をしていた。そして、ある幼児は保育室にあった手づくりマイクを持ち出し、台の上の幼児の口に近づけていた。あっという間に「小さなお楽しみ発表会」ができあがったのである。幼児に「やりたい思い」があれば、自然と発表会が始まり主体的に遊びを進める幼児が現れるのだと実感した。

担任は発表会の参加者になりきり、幼児の言動を意味付けし、称賛した。そして、そこに現れたのが3歳クラスの副担任であった。これまで、一年間の遊びの中で異年齢とのかかわりの面白さについて情報共有してきたが、とりわけ、3歳クラスの幼児がお客さんとしてやってくることの素晴らしさを感じていた。目を輝

かせながら4歳クラス児のやっていることを見て、それを真似しようと聞いてくるのである。4歳クラス児は3歳クラス児から聞かれると、にっこり笑顔で対応していた。その表情から「見せてあげたい」「教えたい」という思いの高まりを感じていた。3歳クラス児に伝わるよう身振り、手振りをしながら伝えようとする姿は、幼児の成長の姿そのものである。そのような姿を支えてきていたのが3歳クラスの教師の存在であった。常に全体の雰囲気をとらえ、4歳クラス児の遊びの中にかかわってくることで、遊びが広がり、「一緒にやろう」「手伝うよ」という姿が生まれていた。環境構成というと、物の出し方や配置が主であると捉えがちであるが、今回の3歳副担任のように、3歳クラス児をお客さんとして連れてきてくれる教師の存在も、環境構成の一つなのだと感じた。この遊びを通して、M児の周りにはN児をはじめ、いつも仲間が集まってくるようになっていた。

2月10日②

3歳クラス児：「ショーごっこやってるよ～」

M児：「何なに？」

3歳クラス児：「私たちもショーやってるから、来てください」

M児：「いいよ。Nちゃん、行く？」

N児：「行く」

3歳クラス児：「こっちだよ～」

3歳保育室に行く。

3歳クラス副担任：「よかったね。やまのお姉さんたちが見に来てくれたね」

3歳クラス児：「うん。それじゃあ、始めます」

ショーが始まる。

M児：「楽しいね」ショーを見て拍手する。

N児：「面白かったね。そうだMちゃん、一緒にまたやろう」

M児：「そうだ、今度はあれつくろう」

N児：「じゃあね。バイバイ」4歳保育室に戻る。

3歳クラス児が来ていた衣装は、以前3歳クラスの副担任が、つくり方が分からずに悩んでいた幼児を連れて、M児に聞きに来たことがきっかけで完成したものだった。「分からなかったら、やまのお兄さんお姉さんに聞きに行こう」という雰囲気が3歳クラスにあり、それは4歳クラスも同じだった。これは、本年度の研修でカンファレンスを重ねる中から明確に浮かび上がってきた、保育の心もちである。教師が直接かかわるのではなく、時間がかかったとしても他の幼児につなげ、伝え合い、教え合いながら遊びをつくっていくことが、より確かな幼児の成長につながるという考えである。この場では、担任や3歳クラスの副担任が幼児に声をかけなくても、自然とかかわりが生まれ、一緒に遊びを楽しむ姿が見えていた。M児は以前、衣装づくりを頼まれたときに、自分の遊びを優先し、断り続けたことがあった。この日のM児の姿は頼れる年上のお姉さんの姿そのものであり、成長した姿と捉えた。また、M児はその後、さらに自分の衣装づくりの新しい飾りを思い付くきっかけにもつながっていた。

考察

その後、M児の衣装づくりがきっかけで、4歳クラスの5割近い幼児が衣装づくりを楽しむことにつながった。それはどれも、これまでつくってきた衣装から、さらに発展的なものへと変化していた。M児はお楽しみ発表会で多くの友達と一緒に衣装を披露し、ポーズを決め、歌を歌っていた。発表中の自己紹介で、担任は衣装づくりにかかわる工夫について尋ねた。M児は意気揚々とその魅力について語っていた。M児をはじめ、遊びにかかわった幼児の育ちを支えたのは、間違いなく職員全体の遊びに対する捉えと心持ちが共有されていたからであると考えられる。M児から学んだ3歳クラス児は来年、素敵なお兄さん、お姉さんになって、次の3歳クラス児に遊びを教えるのではないか。そうした遊びの伝承が自然と行える雰囲気が園全体にできていること、その良さを理解し、間接的に、そして継続的に保育を行うことができたと感じている。

今回、担任が行った援助は、幼児に直接声をかけたり、材を提供したりすることをできるだけ控え、遊びの様子を見ながら環境構成を変化させていくことを中心にした。その背景にはカンファレンスによるクラスを超えた情報共有と、職員間の共感・合意からなる保育の心もちが大きく影響していたと捉えている。教師はそこに課題を見付けると、すぐに直接声をかけ、手を出し、「よくしよう」と行動してしまいたくなる。しかし、「幼児が自ら育とうとする気持ち」を大切にすることで、今回の様に幼児同士がつながり、自然な広がりや深まりの中で遊びが展開される姿をと捉えることができた。そして、その背景に年下の幼児があこがれの気持ちをもって遊びにかかわる環境が整えられていたことは大きい。園全体にこのような雰囲気があることで、幼児の主体的な遊びを支えることができたと考えている。今後も、より職員間の連携を密にしなが、幼児の「やりたい」を広く支える保育を行っていく。

<4歳クラス VIII期 2月> 「環境構成で『やりたい』を支える」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、これまで、遊びの多くを屋外で行ってきた。保育室や遊戯室での遊びも行われてきたが、昨年度のようにお屋さんごっこなどで使われた道具を残すといったことをしなかった。そのため、衣装づくりやショーごっこなどの遊びが、例年に比べて少ないと感じていた。反面、異年齢の遊びの交流が増え、年上の幼児から遊びを「教わる」、そして、年下の幼児に遊びを「教える」姿が多くみられるようになった。

VIII期に入ると、近年稀にみる大雪の影響により、幼児のほとんどが室内で過ごす日が増えていた。カプラ、一輪車、フラフープなど、VIII期の環境構成によって出された遊びに没頭する姿が見られるようになっていた。そうした中、毎年2月に行われる「お楽しみ発表会」が近づき、教師は幼児が遊びの何に着目し、おもしろいと感じているのかを読み取りながら保育を行っていた。本園の発表会は「やりたいことの発表」として位置付けられている。担任は副担任と声をかけ合い、誰がどのような遊びに目を向けているのかを情報共有しつつ、保育を行っていた。

そのような中で、教師は一人で遊ぶM児の姿に気がついた。M児はプリンセスや変身ヒロインなどが好きで、ビニール袋で製作した衣装を着て遊ぶことが多かった幼児である。特に今年大ヒットしたアニメのキャラクターに扮するべく、緑の折り紙を口に咥え、ヒロインになりきって遊んでいた。¹前期につくった衣装はそのまま保育室に保管し、いつでも着ることができるようになってあったが、VIII期に入ってから一度も着る様子が見られなかった。担任は、副担任との振り返りの中で、²「衣装がそこにあることで、もう一度新しくつくることができなくなっているのではないかと話題にした。そこで、衣装の保管場所をすべて移動し、整理してみることにした。」すると、次の日、M児が担任に話しかけてきた。

2月2日

M児：「先生、ピンクのビニール袋ください。あと、折り紙はどこかなあ」
教師：「ビニール袋？何に使うのか教えてくれる？」
M児：「あのね、ねずこの衣装をつくるの」
教師：「ねずこ？分かったよ。Mちゃん、ねずこ大好きだったね。他に欲しいものがあったら教えてね」
M児：「あとね、黒いビニール袋」
教師：「黒？ねずこって黒かったっけ？³Nちゃん、知ってる？」
N児：「え～何だろう。あつ、分かった。上に着るやつじゃない？」タブレットPCに映されたキャラクターの衣装を見る。
M児：「そうそう、先生、だから黒いビニール袋ください」
教師：「教えてくれてありがとう。じゃあ、持ってくるね」
しばらく衣装づくりを行うM児。
M児：「先生、ちょっとここ持ってて」
教師：「いいよ。ここでいいかな。おお、Mちゃん、こここのところを切るんだ」ビニール袋を真ん中から2つに切断する。
M児：「そうそう。これをね、肩に付けるの」
教師：「なるほど、面白いね。Nちゃん、Mちゃんがどんどんねずこになっていくね」
N児：「これ、肩から取れちゃうんじゃない？」
M児：「えっ、ちょっと先生、付けるからここ持っててください」
教師：「いいよ。本当だ、ここNちゃんの言った通り外れちゃうみたいだよ」
N児：「テープ付けたら」
M児：「あつ、じゃあテープ持ってくる」
しばらくN児と2人で色の違う2つの衣装をつなぎ合わせる。
M児：「できた。先生見てみて」
教師：「いいね。すてきななあ。ねずこそっくりだよ」
N児：「後ろどうなってるの？」M児の背中を見る。

コメントの追加 [k1]: 幼児の遊びの読み取りから環境構成を変えることの大切さについてコメントが多かった。衣装の位置を変えることと片付けることは似て異なるものである。新しくつくりたいという思いを環境構成によって支えることができたと考えている。

¹ つくったものをとっておける環境。(b)

² 幼児の姿から援助を考えている。(g) 中長期的な遊びの読み取りを環境構成に活かしている。しまうこともその一つ。(e) 幼児の姿から思いを読み取り、環境構成に活かしている。(b) 環境構成の大切さを改めて感じた。物一つでここまで幼児の動きが変わることに驚いた。

(f)

³ 友達とのかかわりをつないでいる。(e)

⁴ 称賛する言葉かけてM児の自信や満足感につなげている。(e)

M児：「こんなのよ。どう？」両肩の黒いビニール袋の切れ間の背中部分をさする。
N児：「いいね」

担任は驚いた。衣装を移動させたその日に「衣装をつくりたい」と話しかけてきたからである。ヒロインになりきる遊びは「なりきるまでの楽しさ」と「なりきって遊ぶ楽しさ」の2つの魅力があると理解している。振り返ると、M児はこれまでも同じアニメキャラクターの衣装をつくり、ハンガーにかけて保存していた。そして、それを着てなりきり遊びを楽しむ姿は見えるものの、遊びに没頭する様子は、衣装づくりの方が圧倒的に多かったと感じている。今回、これまでの衣装を整理したことで、M児の心に「また、新しい衣装をつくりたい」という気持ちが湧き上がったのだろう。環境構成がもたらす影響力の大きさを実感した瞬間だった。M児はこれまでつくっていた衣装とは異なり、黒のビニール袋をつなぎ合わせたいと願っていた。⁵担任はそれが何を意味するのか分からず、詳細を知りたい思いと、遊びを他の幼児に広げたい思いから、N児に尋ねてみた。タブレットPCで検索しながら確認した「上に着るやつ」とは羽織物のことだと理解した。しかし、本来、「羽織るもの」であって、2つに分かれているものではない。しかし、タブレットPCにあるキャラクターの画像を見て気付いた。⁶羽織物の裏が見えず、マフラーのように肩にかけられているにも見えたからである。N児も同様に理解しているようであったことから、⁷担任は特に正確な羽織物の形を知らせることをしなかった。M児がやりたいことは精巧な衣装をつくることではなく、キャラクターになりきることであったからである。N児もその後、衣装づくりに必要な材料が欲しいと担任に伝え、M児とキャラクターの特徴などについて話しながらかついていた。

M児とN児は衣装ができあがると、嬉しそうに遊戯室に出かけ、友達や教師に見せに行っていた。その後衣装を見せるだけでなく、ポーズをとったり歌を口ずさんだりする姿を見て、⁸担任と副担任は「より思い通りの衣装ができあがったことで、今度は『なりきって遊ぶ』を楽しみたいと思いはじめたのではないかと考えた。そこで、環境構成として、幼児がつくったものをショーごっこのようになりきって遊ぶ「場」を用意することで、「なりきって遊びたい」を支えることにつながるのではないかと考えた。

2月10日①

N児：「ねえ、どこでやる？」
M児：「いいところないかなあ」遊戯室を見渡す。保育室前に置かれていた台を見付ける。
M児：「これなに？」
N児：「台みたい。乗ってもいいかなあ」
しばらく台の上に立ち、遊戯室を見回す。
N児：「Mちゃん、これいいね。ここで歌えるんじゃない？」
M児：「いいね。歌欲しいなあ」教師を探す。
N児：「先生、歌かけるやつ出して」
教師：「CDラジカセのことかな？ねずきさん、どんなことをしたいの？詳しく教えてくれる？」
M児：「あのね、鬼滅の歌で歌いたい」
教師：「なるほど、分かったよ。待っててね」CDラジカセを台の横に用意する。
遊戯室に音楽が流れる。
O児：「Mちゃん、入れて」
M児：「いいよ。じゃあ、Oちゃんこっちな」
教師：「⁹Nちゃん、素敵だね。楽しそう。ねえ、Nちゃん、先生もこの辺で見ていいかな？」台の前に観客のように座る。
N児：「いいよ。あつ、分かった。椅子持ってくる」保育室から幼児用の椅子を持ってきて並べる。
O児：「私も持ってくる」
P児Q児R児：「入れて」

コメントの追加 [k2]: 幼児の思いを支えるために、幼児理解をしっかりと行い、思いを読み取ることが大切になっていることに多くのコメントがあった。M児は記録の他にも「どうしようか」「それじゃあこれを」などつぶやいていた。それらの読み取りをもとにM児の思いを捉えていたことが、適切な援助につながったと考えている。

⁵ 常に幼児の思いを理解し、その思いに添って援助しようとする心もちである。(e) 幼児のやりたいことが何かを理解しようとしている。他の幼児に聞くことで、幼児同士のつながりも生まれている。(b)

⁶ 幼児が何をやりたいのか、その思いを理解した上での援助だと感じた。(f)

⁷ 幼児の「何がやりたい」のかを理解して援助している。(g) 幼児理解、子どものやりたいことを理解しようとする教師の姿勢 (d) 教師の「よかれ」で幼児が求めていることをすることは避けている。(e) 幼児の思いを支えるのに本当に大切なことを捉える教師の読み取り (a) 幼児がやりたいという思いを大切にしている。何に興味があり、何をやりたいと思っているのかを読み取って援助している。(b)

⁸ 環境構成の重要性 (d) 幼児の姿から、遊びの発展に使えるようなものを準備している。(e)

⁹ 「見せたい」思いをお客役になって支える。他の幼児が興味をもつきっかけにもなっている。(e) 幼児の姿を称賛し、教師がお客さん役になることで、椅子をもってくる考えが生まれ、遊びが広がっている。(b)

M児：「いいよ。でも入らないよ」
 Q児：「ちょっと、ここ狭い」
 P児：「じゃあ、順番ね。ここによう」台の後ろのスペースに並んで座る。
 R児：「じゃあさ、私たちの番になったら・・・」P児と相談する。
 3歳クラス副担任：「ねえねえ、やま組さん何かやってるよ。見に行きましょうよ」
 N児：「ここ座っていいよ」
 M児：「鬼滅のショーがはじまるよ〜」

ここでは、環境構成としてショーごっこなどで使う¹⁰ミニステージ台を一つ遊戯室の隅に置いておいた。必要があれば使うだろうとそと用意したものだったが、それがM児達の「なりきって遊びたい」という願いにつながった。M児達はイメージが膨らんだのか、CDラジカセが置かれ、音楽がかかり、椅子が並んで観る幼児ができるなど、次々と遊びを広げていった。たまたま移動させた台の後ろが少し空いていたことで、そこが次の順番待ちの場所にもなっていた。みるみる幼児が増え、踊ったり拍手したり始める。ある幼児は空き箱に穴を空けて小さな箱をつなげ、それをカメラに見立てて撮影する真似をしていた。そして、ある幼児は保育室にあった手づくりマイクを持ち出し、台の上の幼児の口に近づけていた。あつという間に「小さなお楽しみ発表会」ができあがったのである。¹¹幼児に「やりたい思い」があれば、自然と発表会が始まり主体的に遊びを進める幼児が現れるのだと実感した。

¹²担任は発表会の参加者になりきり、幼児の言動を意味付けし、称賛した。そして、そこに現れたのが3歳クラスの副担任であった。これまで、一年間の遊びの中で異年齢とのかかわりの面白さについて情報共有してきたが、とりわけ、3歳クラスの幼児がお客さんとしてやってくることの素晴らしさを感じていた。¹³目を輝かせながら4歳クラス児のやっていることを見て、それを真似しようと聞いてくるのである。4歳クラス児は3歳クラス児から聞かされると、にっこり笑顔で対応していた。その表情から「見せてあげたい」「教えた」という思いの高まりを感じていた。3歳クラス児に伝わるよう身振り、手振りをしながら伝えようとする姿は、幼児の成長の姿そのものである。そのような姿を支えてきていたのが3歳クラスの教師の存在であった。¹⁴常に全体の雰囲気をとらえ、4歳クラス児の遊びの中にかかわってくることで、遊びが広がり、「一緒にやろう」「手伝うよ」という姿が生まれていた。環境構成という、物の出し方や配置が主であると捉えがちであるが、今回の3歳副担任のように、3歳クラス児をお客さんとして連れてきてくれる教師の存在も、環境構成の一つなのだと感じた。この遊びを通して、M児の周りにはN児をはじめ、いつも仲間が集まってくるようになっていた。

2月10日②

3歳クラス児：「ショーごっこやってるよ〜」
 M児：「何なに？」
 3歳クラス児：「私たちがショーやってるから、来てください」
 M児：「いいよ。Nちゃん、行く？」
 N児：「行く」
 3歳クラス児：「こっちだよ〜」
 3歳保育室に行く。
 3歳クラス副担任：「よかったね。¹⁵やまのお姉さんたちが見に来てくれたね」
 3歳クラス児：「うん。それじゃあ、始めます」
 ショーが始まる。
 M児：「楽しいね」ショーを見て拍手する。
 N児：「面白かったね。そうだMちゃん、一緒にまたやろう」
 M児：「そうだ、今度はあれつくろう」
 N児：「じゃあね。バイバイ」4歳保育室に戻る。

3歳クラス児が来ていた衣装は、以前3歳クラスの副担任が、つくり方が分からずに悩んでいた幼児を連

¹⁰ たった一つの援助で遊びが発展していく。教師は幼児の姿を想像しているからこそできる援助。(g)

¹¹ 教師のこうした捉えが幼児の主体的な遊びを支え、自分たちで遊びをつくっていくことにつながる。(a) 発表会であっても、普段の遊びと変わらず、子ども主体、子どもの思いを一番考えている。(b)

¹² 「見せたい」思いをお客役になって支える。他の幼児が興味をもつきっかけにもなっている。(e)

¹³ 教師が直接教えるのではなく、異年齢の幼児から教わる時と場を捉えた援助をしている。(g) 年上の幼児に憧れの気持ちをもつ、年下の幼児にやさしく接することは、異年齢の関わりが生んだ姿。(b)

¹⁴ 特に遊戯室や園庭では、全体の様子を捉えることを大事にしている。(e)

¹⁵ 「来てくれてうれしい」という思いに寄り添う言葉かけ (e)

れて、M児に開きに来たことがきっかけで完成したのもだった。¹⁶「分からなかったら、やまのお兄さんお姉さんに開きに行こう」という雰囲気は3歳クラスにあり、それは4歳クラスも同じだった。これは、本年度の研修でカンファレンスを重ねる中から明確に浮かび上がってきた、保育の心もちである。¹⁷教師が直接かかわるのではなく、時間がかかったとしても他の幼児につなげ、伝え合い、教え合いながら遊びをつくっていくことが、より確かな幼児の成長につながるという考えである。この場では、担任や3歳クラスの副担任が幼児に声をかけなくても、自然とかわりが生まれ、一緒に遊びを楽しむ姿が見えていた。M児は以前、衣装づくりを頼まれたときに、自分の遊びを優先し、断り続けたことがあった。この日のM児の姿は頼れる年上のお姉さんの姿そのものであり、成長した姿と捉えた。また、M児はその後、さらに自分の衣装づくりの新しい飾りを思い付ききっかけにもつながっていた。

考察

その後、M児の衣装づくりがきっかけで、4歳クラスの5割近い幼児が衣装づくりを楽しむことにつながった。それはどれも、これまでつくってきた衣装から、さらに発展的なものへと変化していた。M児はお楽しみ発表会で多くの友達と一緒に衣装を披露し、ポーズを決め、歌を歌っていた。発表中の自己紹介で、担任は衣装づくりにかかわる工夫について尋ねた。¹⁸M児は意気揚々とその魅力について語っていた。M児をはじめ、遊びにかかわった幼児の育ちを支えたのは、間違いなく職員全体の遊びに対する捉えと心持ちが共有されていたからであると考えられる。M児から学んだ3歳クラス児は来年、素敵なお兄さん、お姉さんになって、次の3歳クラス児に遊びを教えるのではないかと。¹⁹そうした遊びの伝承が自然と行える雰囲気が園全体にできていること、その良さを理解し、間接的に、そして継続的に保育を行うことができたと感じている。

今回、担任が行った援助は、幼児に直接声をかけたり、材を提供したりすることをできるだけ控え、遊びの様子を見ながら環境構成を変化させていくことを中心にした。²⁰その背景にはカンファレンスによるクラスを超えた情報共有と、職員間の共感・合意からなる保育の心もちが大きく影響していたと捉えている。教師はそこに課題を見付けると、すぐに直接声をかけ、手を出し、「よくしよう」と行動してしまいたくなる。しかし、²¹「幼児が自ら育とうとする気持ち」を大切にすることで、今回の様に幼児同士がつながり、自然な広がりや深まりの中で遊びが展開される姿をと捉えることができた。そして、その背景に年下の幼児があこがれの気持ちをもって遊びにかかわる環境が整えられていたことは大きい。園全体にこのような雰囲気があることで、幼児の主体的な遊びを支えることができたと考えている。今後も、より職員間の連携を密にしながら、幼児の「やりたい」を広く支える保育を行っていく。

コメントの追加 [k3]: 異年齢の関わりだからこそこの幼児の育ちについて多くの共感を得た。そこに至るには、3歳クラスの副担任の存在が大きかった。自然と異年齢のかわりが生まれるよう、声をかけ、一緒に遊びに参加している。環境としての存在が幼児の思いを支えたと捉えている。

コメントの追加 [k4]: 職員全体の心もちの方向性が重なっていると感じている。これまでのカンファレンスの積み重ねによるものであると考える。

¹⁶ 幼児の思い、幼児同士のつながりを大切にするという共通認識。(b)

¹⁷ かかわりの中で解決する経験がよりよく生きる力につながる (e) これが全体ではないが、幼児自身のもつ力に働きかけることで、育ちや成長を促すことができるという考えを共有しているのは大切。(a) 自然と異年齢のかわりが生まれている。(b) 異年齢でのかわりから育つ力を改めて感じた教える幼児、それぞれに育つ力があり、互いの存在や関わり合う経験を経て、異年齢の関わりだからこそ身に付く力があるのだと感じた。(f)

¹⁸ やりたいことだったからこそ、自分の言葉で語れている。遊びだけでなく、年下の幼児をおもいやる気持ちも伝承されていく (b)

¹⁹ 職員間の情報共有の重要性 (d) どの職員も同じ心もちで保育する大切さが分かる。(e)

²⁰ カンファレンスでの情報共有により、同じ心もちで保育ができている。(b)

²¹ 幼児のことを一番考えているこそ。(b)